

北陸地域における
フェムテック産業振興の可能性研究
報告書

2024年3月

一般財団法人北陸産業活性化センター

目 次

1. はじめに	1
2. 女性活躍の現状と課題	2
(1) 北陸地域における女性活躍の現状	2
(2) 女性活躍が進まない背景	3
(3) 女性活躍に向けた課題	3
(4) 課題解決のための構想	4
3. 事業化に向けた具体的な方策	8
(1) フェムテック製品・サービスのニーズ把握	8
(2) 経済産業省「フェムテック関連施策」の活用	9
(3) バイオデザインを用いたニーズドリブな医療イノベーションの創出	10
(4) 社会的健康の事業化を実現するデザイン思考の活用	11
(5) 北陸地域におけるフェムテック産業振興に向けての方策	11
4. 今後の活動案	13
(1) 基本的認識	13
(2) 中間組織の設置	14
5. おわりに	16
参考資料1	18
北陸地域におけるフェムテック産業振興の可能性研究会 委員・オブザーバー名簿	18
参考資料2	18
第1回研究会議事録	19
第2回研究会議事録	27
第3回研究会議事録	36
第4回研究会議事録	47

1. はじめに

地方における人口減少と少子高齢化は、日本経済を脅かす喫緊の課題である。地方において経済の好循環が実現しなければ、人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させ、さらには、地方が弱体化すると、地方からの人材流入が続く大都市もいずれ衰退し、日本の競争力が弱まってしまう。地域が衰退することを放置したままでは、日本の未来はないと言っても過言ではない。

このような中、2015年に国連が提唱したSDGsの17の目標の中に「ジェンダー平等」があるが、この目標の実現に向け、日本政府は、男女共同参画は政府の重要かつ確固たる方針であり、国際社会で共有されている規範であるとした。日本の女性活躍は、昭和の時代に形作られた各種制度や男女間の賃金格差を含む労働慣行、固定的な性別役割分担意識など、制度・慣行・意識が固定されているという構造的問題の存在により世界に比較すると遅れている。この課題の対応の鍵は「女性の経済的自立」であり、対策の具体化として女性活躍・男女共同参画の重点方針2022(原案)が、2022年5月27日付で男女共同参画会議から発信された。この中で「フェムテック」という言葉が記載され、さらに「女性の健康」に関しては、「働く女性のライフイベントに起因する望まない離職を防ぐため、フェムテックを活用した働く女性の健康維持を解決するためのサポートサービス等に関し実証事業を行う」等が記載され、新しいフェムテック市場形成の可能性が示唆された。

しかしながら、地域に立地するいくつかの企業等が製品・サービスを開発し、市場に提供したとしても、地域経済の成長は限定的である。大きな経済成長の実現に向けては、地域における産業振興が不可欠であり、停滞している地域経済を成長させるブレークスルーに向け、フェムテック産業振興をどのように実現すれば良いのか議論が必要である。

一方、女性活躍の推進は、企業にとっても多様性の向上を通じイノベーションを喚起するとともに、企業価値を高め企業業績の発展に寄与すると考えられる。

以上の状況を勘案し、女性活躍と経済成長の好循環実現に向け、女性の健康をサポートするフェムテック製品・サービスを創出するとともに、地域での産業振興を実現するため、今般「地域におけるフェムテック産業振興の可能性」に関する研究会を立ち上げ議論を行った。

本研究会では、行政、医療、企業、民間等における各分野の有識者にご参集いただき、経済産業省中部経済産業局電力・ガス北陸支局および富山県・石川県・福井県にもオブザーバーとしてご参加いただき、計4回にわたって開催し、地域で過去に行ったヘルスケア産業の活性化に関する施策を振り返りつつ、イノベーション創出に向けた一連の議論を行った。議論に当たっては、北陸地域における女性活躍の現状や課題、現実的な課題の解決方法について検討するとともに、北陸地域でのフェムテック産業振興に向けたKGI、KSF、KPIの策定、KPIの実現に向けた具体策と事業アイデアについて検討した。

本報告書は、これらの内容について取りまとめたものである。

2. 女性活躍の現状と課題

(1) 北陸地域における女性活躍の現状

北陸地域の女性活躍の現状を把握し、地域の状況を概観した。

カテゴリー	地域の現状
女性の就業	<ul style="list-style-type: none">□ 男性の働き方を基準にした管理職像を考えると、女性は管理職になりたいと思うわけがない。女性が働きやすい社会は、男性も働きやすいという合意ができるくらい、社会の価値を変えることが必要である。□ 女性が管理職になりたがらない理由は以下の通り。¹<ul style="list-style-type: none">① 日々の業務分担・制度・慣例から自分が管理職になる可能性を感じていない。② 長時間労働や家庭と仕事との両立に不安を感じている。□ 北陸地域は、女性就業率は高いが管理職比率が低い。女性が管理職に進出しやすい環境が整っていない。²□ 女性が働くことは評価されつつも、仕事において自己実現を果たすか、または家庭や社会での評価を求めるかといった判断が本人に求められている。□ 地域では、過去からの地域社会の価値観も影響し、一般的に専業主婦は「遊んでいる」と言われる等、家事に対する経済的価値観が低い。□ 他国は、女性の大臣や大使の多さが目立つが、地域でも多数の女性管理職やリーダーが現れることが期待される。□ 女性が仕事と家庭の両方に責任を持ち、長時間働くことが評価される一方で、家事や育児にも責任を持たされ、夫の帰りが遅いことから、仕事における自己実現を諦めがちになり、それが幸福度に影響している。
女性の健康サポート	<ul style="list-style-type: none">□ テクノロジーの進化により、女性は生理周期の管理などをアプリで行い、ピルの解禁で生理周期をコントロールできるようになったことで、健康や生活のバランスに対する認識が変わってきた。□ 性に関する教育が不足しており、ジェンダーの時代において、もっとオープンで理解しやすい社会を作る必要がある。□ 女性の健康に関連する商品や情報がなかなか普及していない。オンライン時代の現在においても、情報が北陸に遅れて届くことが多い。□ 若い女性において、健康等の情報をシェアしたり、配信したりすると社会価値化しやすいが、現状は出来ていない。

¹ 北陸経済連合会「女性の就業意識に関する実態調査(2023年11月20日公表)」からも同様の結果が得られている。

² 同上

	<ul style="list-style-type: none"> □ 心の病気が増加し、傷病手当金支給が増加している。人間ドック基準の見直しや高血圧の薬の使用削減の必要もある。 □ 福井県高浜地域では、「女性の健康課題と持続可能な地域づくり」に関する取組が行われ、社会学的なアプローチが取られている。また、日本フェムテック協会などとの連携が進んでいる。 □ 従来の慣習に起因して、女性の家事負担を軽減し、職業的・身体的健康をサポートする取組が浸透していない。事例として、家事支援サービスが低単価で利用できるにもかかわらず、活用されていない。 □ 福井県は、幸福度で常にナンバーワンである一方で、人口が減少している矛盾が存在している。これは、原子力発電所の立地により、公園や施設の整備が行われていることが、幸福度の数値に反映されているもので、その魅力度が低いことが人口減少につながっている。 □ 立山は女人禁制である一方で、布橋灌頂会という救済の道があり、こうした文化を北陸フェムテック産業として活かすことが重要である。
--	--

(2) 女性活躍が進まない背景

日本における女性活躍を推進していく上での障壁(構造的要因)について、内閣府男女共同参画局が行った「女性活躍と経済成長の好循環実現に向けた検討会」の報告書(2023年5月)では、次のとおり指摘している。

我が国では、意識・慣行・制度の三要素が相互に作用することで、ジェンダー不平等の悪循環が形成されている。すなわち、「男性は稼ぎ主として、外で仕事をして女性は家庭を守るべきだ」との固定的性別役割分担意識が、家事・育児等の無償労働時間の男女間の偏りや、長時間労働や家庭の事情を考慮しない転勤等を所与のものとして受け入れる、男性の正社員が社内で昇進し高い賃金を得るという日本型雇用慣行に影響を及ぼしている。そうした日本型雇用慣行を踏まえて形成された現行の諸制度が、女性が専業主婦または働くとしても家計の補助としての就労にとどまらせている。

長年にわたり維持・強化されてきた、ジェンダー不平等の悪循環を生み出す構造は堅固であり、これを打破することは一朝一夕では成らず、中長期的な視点を持つ必要がある。他方で、日本の女性活躍の取組は徐々に進んできているものの、企業での役員比率をはじめとして、女性活躍は国際的に見て諸外国から大きく立ち遅れている。

(3) 女性活躍に向けた課題

前述した「女性活躍と経済成長の好循環実現に向けた検討会」の報告書では、以下の①から⑧を女性活躍の課題としており、女性活躍を加速度的に進め、経済成長との好循環を実現するため対応が必要であることを指摘している。

- ① 女性役員の登用とパイプラインの構築
- ② 女性起業家の育成・支援
- ③ 女性デジタル人材の育成
- ④ 地方・中小企業における女性活躍の促進
- ⑤ 固定的性別役割分担意識やアンコンシャス・バイアス(無意識の思い込み)の解消
- ⑥ 家事・育児等の無償労働時間の男女間の偏り(時間格差)の解消
- ⑦ 女性の就労意欲をそぐ諸制度の見直し
- ⑧ ジョブ型雇用への転換、人事評価・登用基準の見直し

地域では女性が仕事と家庭の両方に責任を持ち、長時間働くことが評価される一方で、家事や育児にも責任を持たされている。

女性就業率は高いが管理職比率が低いことも踏まえると、地域での女性活躍の課題は、主に上述の④から⑦と考えられる。

(4) 課題解決のための構想

a. フェムテック産業振興に向けた KGI、KFS、KPI の設定

北陸地域の女性活躍の主な課題は、地域の女性活躍の現状から分析した結果、「地方における女性活躍の促進、固定的性別役割分担意識やアンコンシャス・バイアス(無意識の思い込み)の解消、家事・育児等の無償労働時間の男女間の偏り(時間格差)の解消、女性の就労意欲をそぐ諸制度の見直し」であり、フェムテックを活用した課題解決の具体化に向け、フェムテック産業を考慮した KGI、KSF、KPI³について、現状では具体的な数値目標は示せないが、その項目を次のとおりとした。

一般的に KGI は結果を見る指標で、KSF は事業を成功させるための中間指標、KPI は KGI を達成するまでの過程を評価する指標である。

³ KGI(経営目標達成指標)は、Key Goal Indicator の略で、企業の経営戦略やビジネス戦略を達成するために何をもって成果(ゴール)とみなすのかとする指標のこと。KSF(重要成功要因)は、Key Success Factor の略で事業戦略において事業を成功させるために必要な要因を指す。KPI(重要業績評価指標)は、Key Performance Indicator の略で、企業の最終目標を到達するまでの間に存在する、各プロセスの進捗度を明確にする目的で設定する指標。

KGI 2030年の 理想の姿	北陸地域は、ジェンダーエクイティが推進されるとともに、女性が活躍しやすく暮らしやすい(働く・学ぶ・住む)社会が実現され、もって地域経済活性化と持続性に寄与している。
KSF	【KSF-1】 身体的健康の向上 【KSF-2】 精神的健康の向上 【KSF-3】 社会的健康 ⁴ の向上 ※身体的健康、精神的健康、社会的健康は、世界保健機関(WHO)が1948年に制定した「健康憲章」に基づいた健康の定義による。
KPI	【KPI-1】 地域資産や人的資源の最大限の活用 【KPI-2】 女性健康に係わる新たな価値の創出 【KPI-3】 個社や業界、県境の壁を越えた連携の実現による知識や技術のオープンイノベーションの創出 【KPI-4】 Femtech as a Service の構築に向けたデジタル技術等の活用 【KPI-5】 地域におけるフェムテックに対する認知度向上や普及啓発

b. フェムテック産業の事業アイデア

事業のスタートは、アイデアから始まる。そこで、KPI-1 から KPI-5 の各 KPI に関して、事業化に向けたアイデアの議論を行い、以下の内容が示された。

事業アイデアの議論の結果をまとめると、事項の下表となる。現在先行している製品・サービスは、【KSF-1】身体的健康の向上に関するものが多いが、北陸地域では、【KSF-3】社会的健康の向上に関する事業アイデアが多数出たことから、社会的健康に関する事業ニーズが多い傾向が示された。

⁴ 社会的健康は、ヒトとヒトとのつながり、ヒトと地域とのつながり等、つながりのこと。

分 類	事業アイデア
【KSF-1】 身体的健康の 向上	<p>【KPI-1】地域資産や人的資源の最大限の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 伝統的地域産品と既存食品をフェムテックにて結びつけた新食品やサプリメント類。 ・ フェムテック製品の高齢者医療への適用。 ・ フェムテックを女性の骨粗鬆症や高齢者の骨格筋増加などに対し、適度なストレスを与えた女性の骨格筋や骨を強化。
	<p>【KPI-2】から【KPI-5】 なし</p>
【KSF-2】 精神的健康の 向上	<p>【KPI-2】女性健康に係わる新たな価値の創出</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フェムテックによるメンタルヘルス系のサービスを提供。
	<p>【KPI-4】Femtech as a Service の構築に向けたデジタル技術等の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ アカデミズムとビジネスの連携により、地元大学の精神科の強みを活かしてフェムテック分野での連携を促進。
	<p>【KPI-1】【KPI-3】【KPI-5】 なし。</p>
【KSF-3】 社会的健康の 向上	<p>【KPI-1】地域資産や人的資源の最大限の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フェムテック産業の可能性において、地域の優位性、研究機関や大学の基盤、優れた研究者所在等、人的資源の分布を見える化。 ・ 若い女性向けの労働市場を創出。
	<p>【KPI-2】女性健康に係わる新たな価値の創出</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 企業や家庭がジェンダー平等な状態に進化し、「共創」の概念を取り入れ、共同作業を実施。 ・ 女性の経済的自立と社会的地位向上を目指し、賃金格差、女性管理職の不足、仕事と家庭の両立の課題を解決。 ・ 本研究会の後に協議会を設立し、実行力ある組織を構築。 ・ フェムテック製品のエビデンス構築をサポートするプラットフォーム・サービスを提供。 ・ 北陸地域の共通概念として「土徳」があり、ものづくりや行動の指針に設定。

	<p>【KPI-3】個社や業界、県境の壁を越えた連携の実現による知識や技術のオープンイノベーションの創出</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フェムテック産業に、経済産業省の連携支援計画の仕組みを活用。
	<p>【KPI-4】Femtech as a Service の構築に向けたデジタル技術等の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フェムテックが、地域や社会の健康促進にどのように貢献できるかを評価するプラットフォームを通じての連携や、「Femtech as a Service」の構築に向けたデジタル技術を導入。 ・ 多くのフェムテックやソーシャルウェルビーイング事業は、自治体の支援や企業の福利厚生として存続しているため、サービスやプロダクトが、自治体のサポートに値することを確認する評価プロセスを創出。 ・ ひとり親やDV 被害者に仕事を提供する取組を促進。 ・ 山麓や街といった地域差による住民の価値観の差を少なくするデジタル技術を導入。
	<p>【KPI-5】 地域におけるフェムテックに対する認知度向上や普及啓発</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フェムテックの普及啓発において、ポスターやメディアを活用した、学校や大学の教育プログラムへの組み込み。 ・ フェムテック対象の女性たちは、自分の健康よりも家族の健康に焦点を当てがちであるため、身近なイベントやコミュニティでの啓発を促進。 ・ 協議会の設置では、その存在が全国的に知れ渡るように、3 県が協力して運営費や実効ある組織を構築。 ・ 保育園や幼稚園でも男女の体についての教育として、アニメや漫画などを通じ、子供たちや大人が気軽に受け入れられる形での情報提供。

3. 事業化に向けた具体的な方策

(1) フェムテック製品・サービスのニーズ把握

a. 「健康日本21(第三次)」の新展開

厚生労働省と経済産業省が主導する「健康日本21(第三次)」の新しいプログラムは、2024年4月からスタートし、「女性の健康(フェムケア)」が新しく追加され、女性の健康に関する取り組みが拡大している。このプログラムは人生百年時代に向け



出典:厚生労働省資料を基に西根英一氏が作成

た健康寿命の延伸を目指す重要な取り組みと位置づけられている。「健康日本21(第一次)」では、食生活や運動習慣が強調され、第二次では、休養やメンタルヘルスが加わった。そして第三次では、女性健康(フェムケア)が追加され、その他健康無関心層(特に若年層)、職域ヘルスケア、実地検証・現場実証、デジタルヘルスがテーマとして強調されている。女性健康の追加により、フェムテック市場の拡大が見込まれる。

b. 女性ウェルビーイングの多面的アプローチ

女性ウェルビーイングには、表面的な健康ニーズと未だ触れられていない潜在的ニーズがある。従来のアプローチは、生理や生殖から出発し、最近ではセクシャルウェルネスが注目されており、これらは主に表面的な側面に焦点を当てている。女性の健康には、内面・精神的な側面に対処するために女性社会学的な視点が必要であり、自己肯定感や自己実現へのアプローチも重要である。

c. フェムテック導入の課題

- ・ フェムテックは女性全体を対象とするが、導入する際には優先順位をつける必要があり「北陸フェムテック」においては、女性だけでなく社会全体にアウトカムできるように設定することが重要である。
- ・ 女性特有の健康問題を解決しサポートするための既存のアイテムには、エビデンスが不確かなものが多く、ヘルスケアビジネスでは、検証と実証が重視されることから、北陸地域での臨床等のフィールドワークが将来的に必要となる。
- ・ 社会的健康(ソーシャルヘルス)がウェルビーイングの主要な焦点であり、健康寿命の延伸においても重要なエビデンスが得られている。ソーシャルヘルスは人と人、人と地域社会との結びつき、出来事とのつながりを指し、これらのつながりがソーシャルキャピタルと見なされていることから、地域社会における北陸ブランドとしてのフェムケア、フェムテックのアイデアを考える際には、イベントや話題、課題などがディスカッションの中心となる。

d. 地域イノベーションと地域の未来像

「健康日本21(第三次)」で生じるニーズや、女性ウェルビーイングに必要な女性社会的アプローチによる潜在的ニーズの事業化に対し、フェムテックを導入するためには、地域でイノベーションを起こすことで地域経済の活性化が起こる。しかし、技術の発展と社会の変化が複雑に影響し合い、社会の在り方が劇的に変化する中、未来を予測することが困難な時代を迎えているため、目指すべき未来像の実現に向けては、地域内のリソースに固執せず、現行の考え方や枠組みを打ち破り、「地域に不足していること」を外から積極的に取り込み、それとの結合による新たな価値を創造していくことが求められている。地域が「豊かさ」と「幸せ」を感じ、持続的な発展をもたらすためには、地域内外との連携や協力が欠かせない。地域が共存し、持続的に発展していくためには、積極的で柔軟なアプローチが不可欠である。

(2) 経済産業省「フェムテック関連施策」の活用

経済産業省は、2021 年度から「フェムテック等サポートサービス実証事業」を行っている。この事業は、次の方針で取組が行われている。

- ・ フェムテック全体像：女性特有の課題を解決する製品やサービスを提供する分野。
- ・ フェムテックの課題：月経、不妊、更年期など女性の様々な課題に焦点。
- ・ フェムテックの広い概念：家事サービスや育児など、広範な領域も対象。
- ・ フェムテックの経済インパクト：月経や不妊治療に伴う労働損失、女性管理職の減少などの影響が 2 兆円の損失につながる可能性がある。

採択された取組テーマをみると、事業別では、2021 年度は「妊娠・不妊」、「更年期」が多く、2022 年度は「月経・PMS」、「妊娠・不妊」、「ヘルスリテラシー」が並んで多く、サービスカテゴリー別では、2021 年度・2022 年度とも、「セミナー・コンテンツ配信」「専門家相談・サポート」が多い結果となっている。

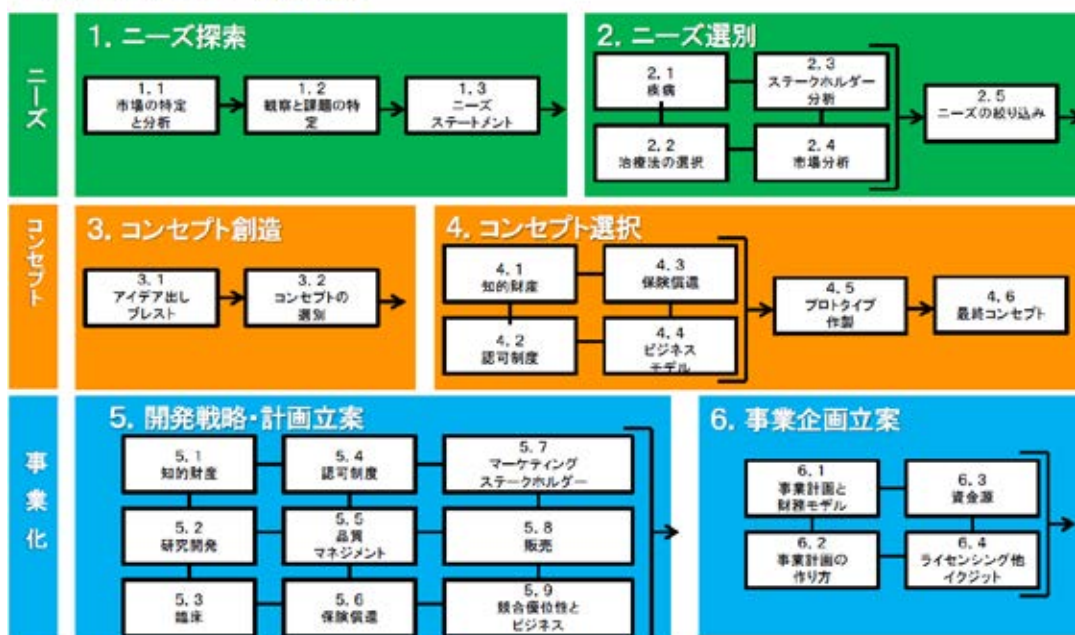
以上から、経済産業の実証事業で採択されている製品・サービスは、身体的健康の向上に関する製品・サービスがほとんどとなっている。また、月経プログラムと更年期プログラム等を通じ、企業では生産性向上、労働損失資産の削減、企業価値向上が期待され、経済産業省は、これらの取組をサポートし、地域での定着と発展を後押ししていく考えが示された。

(3) バイオデザインを用いたニーズドリブンな医療イノベーションの創出

a. バイオデザインプログラムのプロセス

従来取り組まれていたシーズプッシュは、開発を完了しても製品として売れないという問題を抱えていた。これを改善し、ニーズ・プルで開発を行うバイオデザインプログラムは、ニーズを徹底的に把握して開発するため、売れないことはほぼ生じないというプログラムである。バイオデザインのプロセスは下図のとおり、ニーズ探索、ニーズ選別、コンセプト創造、コンセプト選択、開発戦略・計画立案、事業企画立案の順で進行する。

バイオデザイン プロセス



出典:前田祐二郎氏のプレゼンテーション資料

b. バイオデザインプログラムのフェムテックとの関係

・ フェムテックとバイオデザインの連携:

バイオデザインプログラムからは、フェムテック領域において、特に低用量ピルの服薬管理などの革新的なプロジェクトが出ている。これにはピルケースとアプリのデバイスが組み合わさり、遠隔診療のプラットフォームとの連携が進んでいる。

・ 遠隔診療とメンタルヘルス:

フェムテックにおいては、遠隔診療のプラットフォームとの統合が進み、特にメンタルヘルスの領域が注目を集めている。遠隔診療が提供される中で、女性の健康に焦点を当てたサービスや製品が増加している。

・ IT を活用した医療サポートの需要:

生活環境や地域での孤立、貧困状態が健康状態に影響を与えることが認識されており、IT を活用した医療サポートが求められている。

以上から、事業化成功の確率を高くするには、徹底的に検証されたニーズに対し、どのような人がどのような問題に直面しているのかを徹底的に検証して開発することが必要であり、バイオデザインプログラムは、ニーズ・プルでの製品開発を行う最適なプログラムであり、地域でのフェムテック製品・サービスの開発に活用する必要がある。

(4) 社会的健康の事業化を実現するデザイン思考の活用

a. 社会的健康とビジネスの課題

社会的健康は、人と人、人と地域社会のつながりに依存しており、その健康を維持するためには課題が存在する。しかし、これらの課題を解決するビジネス化は、収益の低さなどの問題から難しい場合が多い。

b. デザイン経営の活用

デザイン経営を活用することで、これらの課題を打開する方法がある。デザイン経営により、特に子供の視点を通じて物事を考え、フェムテックに応用することが可能である。

c. デザイン思考アプローチの特徴

デザイン思考アプローチは、主観的なアプローチを強調し、ヒューマンセンタードな手法を用いて問題解決やプロセス改善を進める。またダブルダイヤモンドと呼ばれる手法は、アイデアの拡散と絞り込みを組み合わせた視覚的なプロセスモデルである。

d. キッズデザインの重要性

エクストリームユーザーである子供の視点から得られる新たな視点や気づきが、広く社会にイノベーションをもたらす可能性がある。キッズデザインのアプローチは、革新的で多様なアイデアの生まれる手段として重要である。これにより、製品・サービスが社会の広い層に受け入れられやすくなる。また、子供に優しいデザインが持つ重要性は、親や周りの人たちにも影響を与え、安全で快適な社会を築く一翼を担うため、このデザインアプローチの応用は、高齢者や他のニーズにも適用され、市場の拡大に寄与する。

以上から、フェムテック製品・サービスの開発においては、キッズデザイン思考を活用し、エクストリームユーザー(子供)視点から得られる新たな視点や気づきを導入することが成功の鍵となる。これにより、製品・サービスが社会の広い層に受け入れられやすくなり、地域でのフェムテック製品・サービスの開発に大きな貢献が期待できる。

(5) 北陸地域におけるフェムテック産業振興に向けての方策

a. 地域ネットワークの再活用とフェムテックを軸にした連携支援計画の活用

北陸地域で過去に取り組んだ、文部科学省の知的クラスター創生事業のネットワークを再活用することが可能である。また、経済産業省の地域経済牽引事業に基づく地域未来投資促進法を活用し、フェムテック産業を軸にして連携支援計画を立案して地域の成長発展の基盤強化を図る方法も考えられる。

b. 北陸地域の産業連携

北陸地域においては、産業と大学、公設試を連携して新しい動きを生み出すことが重要であり、中部圏全体の中で北陸の位置づけも検討すべきである。北陸先端科学技術大学院大学を中心に、北陸三県の大学・高専と連携し、大学発スタートアップを通じてフェムテック産業創出を強化する取組が進行中であるので、この活動にフェムテック・スタートアップ創出や事業化を絡めることでフェムテック産業振興を加速できる。

c. 産業振興と連携支援計画

産業振興の観点から、多様な業種をフェムテック産業として結集する取組が必要であり、その際には東京や他の地域との連携も重要な要素となる。また、セミナーや研究会を開催するには資金が必要であり、国の支援制度を活用する方法や、地域未来投資促進法の連携支援計画の作成と提出手順が考えられる。連携支援計画の中で、複数の多様な業種をフェムテックの枠組みで結集させ、産業の融合を進める方向性が非常に重要である。

d. 日本初の多様性を活かした産業振興

産業振興の新しいアプローチとして、産業振興に関するジェイコブズ型理論に代わり、EUが進める多様な業種を取り入れた新しい産業振興の概念を北陸に導入することで、未開拓のフェムテック産業振興が形成される可能性がある。EUが進めている多様な業種を生かした産業振興の考え方を北陸に展開するためには、取り組むための中間組織が必要である。

新しい産業振興の概念やフェムテック産業への取組が、日本初のものとして高い価値を有しており、これによって地域経済に新しい活力をもたらす可能性がある。これらの取組を通じて形成されるフェムテック産業振興が、地域経済の基盤を強化し、持続可能な発展への貢献を果たすことが期待される。

4. 今後の活動案

(1) 基本的認識

新しいフェムテック市場形成の可能性が見えただけでは、地域の経済成長は実現しない。地域に立地しているいくつかの企業等が製品・サービスを開発し、市場に提供を行ったとしても地域経済の成長は限定的である。地域における産業、それを構成する企業の競争力を高めるためには、革新(イノベーション)を促進する仕組みとして、地域における産業振興、その先にあるクラスター形成の有効性が認知されている。世界には、クラスター形成により地域の産業と企業の生産性と競争力を高め、地域経済の再生に成功したところが多くみられる。しかし、過去に国内各地で取り組まれた経済産業省(産業クラスター)や文部科学省(知的クラスター創生事業)の事業は、米国のシリコンバレーを国内に作ることを目的で実施されたが、クラスターは形成できず、成果は得られない結果となっていることから解るように、地域での産業振興やクラスター形成は実現が難しい施策である。

2013年度～2017年度まで富山県・石川県・福井県の三県連携により行った文部科学省の北陸ライフサイエンスクラスター事業においても、抗原特異的な抗体の取得が可能とする装置が開発され、抗体シーズの探索に顕著な成果があったことや、生活習慣病の重症度を診断するメタボリックチップ開発に向けた基盤研究として、糖尿病薬剤効果に関連する遺伝子の絞り込みに成功したこと、さらに異なるチタンの接合技術による生体適合性のよい外科用ハサミを開発する等々の成果も出た。しかし、いずれも商業的パフォーマンスが小さく、地域経済の成長への寄与は少ない結果となった。

産業振興に関する米国の先行研究では、産業振興の理論は次の3種類に分類している。

□ マーシャル・アロー・ローマー(MAR)型振興理論:

同一産業が地理的に振興することにより、産業振興の成長を促進する。地域内において協力的な環境にある。大企業に多い。

□ ポーター型産業振興理論:

同一産業が地理的に振興することにより、産業振興の成長を促進する。地域内において競争的な環境にある。中小企業に多い。

□ ジェイコブズ型産業振興理論:

「多種多様な産業の振興」が技術革新と成長を促進する。地域内において競争的な環境にある。従来の事業(仕事)に取り組んでいる中で、新しい事業(仕事)が生じるように、「連鎖」がキーワードとなっている。中小企業に多い。

上記のうち、米国での分析の結果、産業の多様性が高く、地域内の競争が活発なジェイコブズ型理論が顕在化しているとの結論が得られているが、北陸地域は米国とは環境が異なり、上述した理論をそのまま取り入れると、以前の産業クラスターや知的クラスター創生事業と同様な結果になりかねない。ジェイコブズ型理論はまだ理論化できていないことから、EUが進めている多様な業種、いわゆる多様性といったようなものを生かした新しい振興の考え

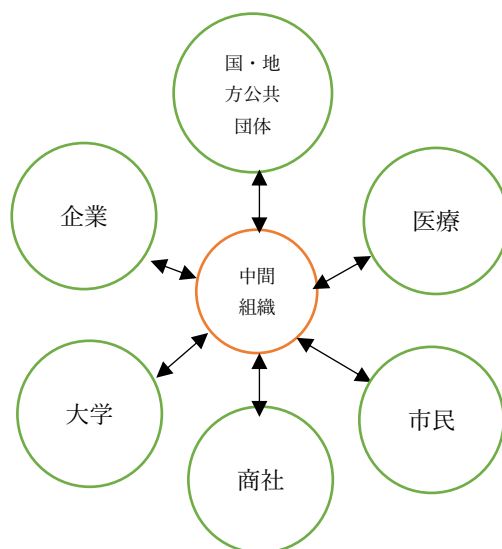
方を北陸に展開するのが良いと考えられる(福井県立大学地域経済研究所松原宏所長)。

以上から、ジェコブズ理論から派生したEUでの多様な業種をいかに振興しメリットを作っていくかという取組を参考にしつつ、地域でのフェムテック産業振興に活用していきたい。これにあたっては、過去に地域で取り組んだ文部科学省事業の経験で得た知見とその際構築したネットワークをアップデートしてニーズを把握するとともに、バイオデザインやデザイン思考を活用し、スタート時点で出口も想定した上で研究開発や事業化を進める。このように地域におけるフェムテック産業振興の設計図をしっかりと作成することにより、地域経済の活性化を具現化するフェムテック産業振興が可能になると考えられる。

(2) 中間組織の設置

フェムテック産業の振興に向けて、事業アイデアや事業ニーズを把握し、研究開発やモデル事業構築を促進する組織は、従来の「産学官」に加え、女性の健康を対象にすることから医師(医)の参加が必須である。また、地域に広く普及させるには、市民(民)の参加も必要と考えられる。また、前述したバイオデザインでは、ニーズ・プルで開発を行うことになっているため出口の心配は少ないと言われているが、ビジネスでは出口が重要であることから、出口(販売)の専門的知識を豊富に持っている商社(商)に参加いただくことにしたい。従って、当面は「産学官医民商の連携」とする。

北陸ソーシャルフェムテック協議会(仮称)

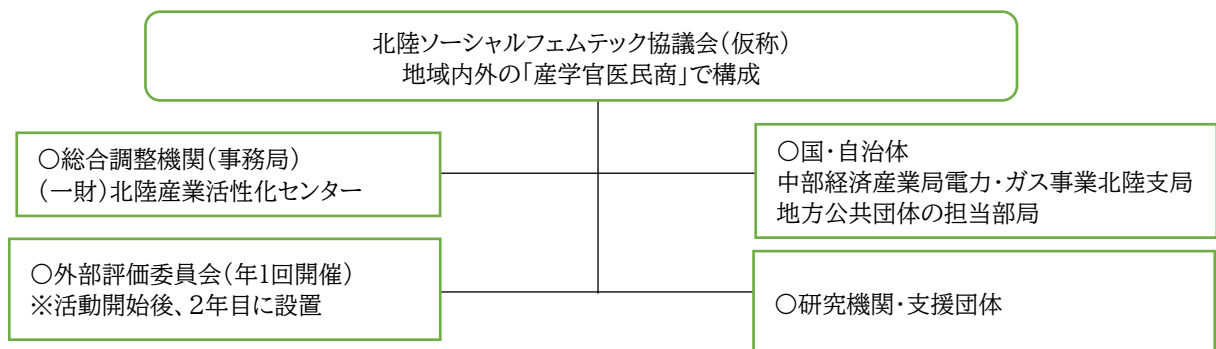


次に、「産学官医民商」間のコミュニケーションが重要になるので、北陸三県を担当範囲とする(一財)北陸産業活性化センターが中心となり、中間組織として「北陸ソーシャルフェムテック協議会(仮称)」を2025年度に設置することとし、その準備として、2024年度は、組織・体制の整備や産学連携による共同研究の創出、普及啓発等に取り組んでいく。

a. 「北陸ソーシャルフェムテック協議会(仮称)」の体制

北陸三県の連携は、市場規模拡大や多業種が県境を超えて交流することによるシナジー効果といった価値創出が期待できる。また、各自治体はそれぞれ個別に活動しているため、三県に対応している(一財)北陸産業活性化センターが総合調整機関(事務局)を担当することとする。

会長	地域内の有識者、民間企業の代表者
事務局	(一財)北陸産業活性化センター
会員	北陸三県の企業(金融機関含む)、大学、医師、市民(NPO)等



b. 「北陸ソーシャルフェムテック協議会(仮称)」の活動

活動項目	内容
地域企業の産業ポテンシャル調査	地域のフェムテック関連団体、スタートアップ、研究機関、人材を調査し、産業の現状やポテンシャルを調査する。
研究会の開催	フェムテック関連の「産学官医民商」などの関係者をつなぐネットワーキング強化を促進するため、研究会を開催する。
教育プログラムの提供	フェムテックに関連するセミナー・ワークショップを開催し、技術やビジネスに関する知識を共有するとともに、地域の人材育成を促進する。
共同研究の推進	地域の企業や研究機関と連携し、フェムテック関連の共同研究プロジェクトを推進するとともに、新技術や製品開発、イノベーションを促進する。
国機関や自治体との連携	国機関や自治体と連携し、フェムテック産業の発展をサポートするための政策提言や補助金の活用などを促進する。
プロモーションの実施	HP 等の活用により、フェムテック企業や新技術等を国内外に積極的に情報発信し、フェムテックの普及、地域ブランド向上、新たなビジネス機会の創出を促進する。
起業家・スタートアップの支援	フェムテックの起業家やスタートアップ、企業に対し、マッチング、ビジネスモデル構築、市場参入戦略の策定、販路開拓(出口)等、実用的な支援を行う。

c. 「北陸ソーシャルフェムテック協議会(仮称)」に向けた令和6年度活動スケジュール

活動項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
中間組織設立に向けた準備 ・ 役員選定、会員の勧誘等 ・ フェムテック関連団体・スタートアップ・研究機関・人材等の産業ポテンシャル調査	→											
研究会の開催(4回)				→			→			→		→
フェムテック・ワークショップの開催 ・ バイオデザイン関連(1回)					→							
地域内外の機関との連携 ・ 企業・大学・研究機関とフェムテック共同研究等の組成を推進 ・ 国や自治体の補助金申請等	→											
プロモーションの実施 ・ HP 等による普及啓発	→											

5. おわりに

日本が遅れている女性活躍の推進に向け、北陸地域において女性が活躍しやすい、暮らしやすい社会を実現することを目的に、女性の健康を心身両面からサポートするフェムテック産業振興を地域に形成することは、以下の観点から非常に価値がある。

a. 経済の活性化と生産性の向上

女性が働きやすい環境が整うと、人口の半分以上が働き手として活躍できるようになり、経済全体が活性化する。この結果、地域の生産性が向上し、持続可能な発展が促進される。

b. 多様性とイノベーションの促進

女性が多様な職種やリーダーシップのポジションで活躍できる環境では、異なる視点やアイデアが組織やコミュニティにもたらされる。この結果、イノベーションが促進され、問題解決の柔軟性が増す。

c. 地域社会の強化

女性が働きやすく、健康な生活を送ることができると、家庭やコミュニティ全体が強化される。この結果、社会的なつながりが増し、共同体としての結束が強まる。

d. 教育水準の向上

女性が働きやすい環境下では、女性の教育機会が増え、その結果、地域全体の教育水準が向上する。これが将来の世代にもポジティブな影響を与える。

e. 健康とウェルビーイングの向上

仕事と生活のバランスが取りやすい環境では、ストレスが軽減され、健康的なライフスタイルが促進される。これが医療費の削減や効率的な医療サービスの提供につながる。

f. 人材の引き寄せ

女性が働きやすく、生活しやすい地域は、優れた人材を引き寄せる要因となる。企業や組織は、女性が活躍できる環境を提供することで、優秀な従業員を獲得しやすくなる。

上記の実現には、まず女性活躍を阻んでいる障壁を全て無くすことが必要であるが、このためには、全ての人々の意識改革が最も重要である。企業の経営者や社会が、女性活躍を少子高齢化に伴う労働力の確保と捉えるのではなく、「女性が持つ多様性の価値」を理解することで、改善が進むと考えられる。

産業は相互に融合関係にある企業の集まりを意味するが、北陸地域では既に多様な企業が存在しており、繊維、化学、医薬品、眼鏡、医療機器、産業機械、精密機械他から、フェムテック製品を「連鎖」して創出するポテンシャルは十分に持っていると考えられる。

本研究では、北陸地域では女性の社会的健康の向上に関する課題が多いことが明らかになり、その対策として、フェムテック産業を地域で創出し対策する方法を検討した。経済産業省が行っているフェムテック製品の実証事業の採択実績のデータや、2024年4月からスタートする「健康日本 21(第三次)」に女性の健康が追加されたことで、今後フェムテック産業の需要はさらに高まることが想定される。その需要を事業化に結び付ける方法としては、ニーズ・プルの

考えを持つバイオデザインや、デザイン思考を活用したキッズデザインの視点が有効であり、次年度以降における取組に反映していく。

最後に、この度の研究会をリードいただいた西根英一委員長、多くの知見を提供いただくとともに重要なご意見をいただいた各委員の皆様に深く感謝いたします。

以 上

参考資料 1

北陸地域におけるフェムテック産業振興の可能性研究会 委員・オブザーバー名簿

◆委員長 [敬称略]

西根 英一 株式会社ヘルスケア・ビジネスナレッジ 代表取締役社長、
事業構想大学院大学 特任教授

◆委員 [敬称略・五十音順]

川上 由夏 株式会社大本久盛館アロマ蒸留所(EarthRing)ディレクター

櫻井 千佳 特定非営利活動法人 Team DiET、
認定特定非営利活動法人 がんとむきあう会 副理事長

進藤 哲次 株式会社ネスティ 代表取締役社長

篁 俊成 金沢大学医薬保健研究域 医学系 内分泌・代謝内科学分野 教授

西垣 淳子 石川県副知事

長谷川 清 DNV ビジネス・アシュアランス・ジャパン株式会社
食品・飲料部 シニアマネージャー

日野 恵美 北陸経済連合会 課長

前田 祐二郎 東京大学医学部附属病院 バイオデザイン部門長

松原 宏 福井県立大学 地域経済研究所長

三浦 雅一 北陸大学 理事・薬学部教授

森田 弘美 株式会社グループフィリア 代表取締役社長

◆オブザーバー [敬称略・順不同]

宮本 哲哉 中部経済産業局電力・ガス事業北陸支局 地域経済産業課長

山崎 早紀子 // 地域経済産業課 企画係長

佐藤 智 富山県 商工労働部 商工企画課 主任

出雲 守 石川県 商工労働部 産業政策課 主幹

亀田 翔太郎 // 主事

橋本 祐一 福井県 産業労働部 産業技術課新技術支援室 企画主査

参考資料 2

- ・ 第1回研究会議事録
- ・ 第2回研究会議事録
- ・ 第3回研究会議事録
- ・ 第4回研究会議事録

『第1回 北陸地域におけるフェムテック産業振興の可能性研究会』議事録

日 時：2023年7月12日(水) 10:00～11:50

場 所：石川県庁行政庁舎 14階 1406会議室 [オンライン併用]

出席者：西根委員長、委員9名(篁・長谷川委員は欠席)、オブザーバー7名、傍聴者11名

内 容：

1. 開会挨拶 [主催者：北陸産業活性化センター常務理事 福井聡]

2. 研究会開催の趣旨及び論点について [事務局 福井 幸博] ⇒配付資料に基づき説明

【開催趣旨・目的について】

[背景]

- ・フェムテックの世界市場は、女性のライフステージの健康課題(生理、不妊、妊活等)を中心に、今後急成長が見込まれている。
- ・2016年に女性活躍推進法が施行され、2020年にはフェムテック振興議員連盟が発足した。
- ・経済産業省では、2021年度からフェムテックとサポートサービス実証事業等を実施している。
- ・2020年発表の世界経済フォーラムでは、日本のジェンダーギャップ指数は、先進国の中で最低レベルの146カ国中116位であり、近未来において技術・人材・社会の大きな変化が予想される。

[目的]

- ・フェムテックを女性のウェルビーイングを実現するための課題解決と位置づける。
- ・女性のウェルビーイングを実現した近未来の社会をまず描き、バックキャストを用いて、これに向けた課題の特定と、その課題を解決するための地域におけるフェムテック産業集積の将来像を実現する方向性を定める。

⇒目標とする産業の基本的な考え方や地域の目指す将来像と目標を明らかにする。

⇒事業全体のガイドラインを作成し、課題抽出、可能な限りの諸条件での対応策について整理する。

⇒最終的には、4回の研究会での各委員からの提言を踏まえ、提案書なる基本構想を取りまとめる。

【第1回研究会の論点について】

- ・女性活躍が世界トップレベルになり、女性のウェルビーイングを実現した2030年頃の社会の姿をイメージする。
- ・女性のウェルビーイング実現に向け、「身体的健康」「精神的健康」「社会的健康」というウェルビーイングの3要素における課題を考える。
- ・北陸地域にフェムテック産業集積を促すうえで重要な論点は何かを考える。

3. 委員長・委員自己紹介

4. プレゼンテーション

「女性ウェルビーイングとフェムテックの事業開発のチェックポイント」について [西根委員長]

- ・健康日本21(厚生労働省が推進する「21世紀における国民健康づくり運動」)第三次では、新たな視点として女性健康(フェムケア)が第一番目に織り込まれている。従来の健康診断メニューでも、メタボ判定など男性向きに作られていたが、骨粗しょう症の数値目標が設定される

など、女性向けに見直されている。デジタルヘルスを有効活用した個別最適化も重要視されている。

- 女性ウェルビーイングの構図として、女性健康学的な顕在的ニーズ（健康課題）と女性社会学的な潜在的ニーズ（存在価値）に分けられるが、流行りのフェムケア・フェムテックは、表層的な部分だけであり、潜在的ニーズには答えていないのではないかと。
- 女性としての存在価値を考えるうえで、妻・母・女といった立場における個としての自己肯定感、自己実現のために目的行動、健康課題を考えるといったアプローチが必要ではないか。表層的ではなく、深層的な部分から、北陸のフェムテックのあり方を考えていきたい。
- Apple Podcast（オンラインラジオ）のプログラムである「OVER THE SUN」では、女性ならではの健康課題だけではなく、社会課題、生き方が取り上げられており、我々の目指すところのウェルビーイングのテーマが集約されている。
- 潜在的な UNMET NEEDS における理想と現実のギャップを把握しないと、フェムテックの開発が表層的な上辺だけのものになってしまうため、そこまでのアプローチを重要視していきたい。
- アンケート調査ではとらえられず、インタビューをしないと把握できない UNMET NEEDS があるため、女性の声をしっかりと聞いていく必要がある。
- 出口として、フェムテックに関わる産業振興を目的としているが、女性が暮らしやすい地域といったシティプロモーションとリンクしていることが重要であり、そのためには、共同でのプレスリリースが必要となる。また、現行のフェムテックは、エビデンスに怪しいところがあるため、アカデミアにおいて学会・論文発表等によるエビデンスをしっかりとプロデュースしてもらうことも重要である。
- 女性全体が対象となるが、その優先順位化が必要となるため、考え方をしっかりとしておくべき。
- 商品やサービスという商材で解決できると考えがちであるが、それだけではビジネスは回せないため、人材や事業主体、知財管理を含めたプロジェクトとして構築していく必要がある。それをベースにして「北陸フェムケア・フェムテック」というメソッドを作るべきと考えており、これにより、女性だけではなく、社会全体に対するアウトカムの設定が重要であり、そのアウトカムは何かということを考えていきたい。
- ウェルビーイングは、健やかで幸せであることと解釈され、Physical、Mental、Social の 3 つの Health のバランスが重要とされるが、このバランスがとれていることを前提として、本日のディスカッションを以下の 2 ポイントとする。
 - ⇒健康寿命延伸において、最も重要な要素は Social Health = Social Capital（つながりの資産）であることが、各国のエビデンスから得られているが、ひと、地域社会、世の中の出来事、季節等とのつながりの延長線上に北陸ブランドのフェムケアのアイデアを作っていけないか。
 - ⇒女性のウェルビーイングを問う場合、従来は、女性社会学的なアプローチが欠如していたため、これをなんとかしたい。北陸地域が、女性社会学的問題に対する具体的なアクションを提示したうえで、ウェルビーイングを語れるような文脈を作っていけないか。あるいは、ウェルビーイングが先だって進んでいくのではなく、結果としてウェルビーイングが導かれるような社会的アクションがある文脈を作っていけないか。

5. 自由討議

[櫻井委員]

- ・20年以上前に大学附属病院の管理職になったが、これまでの生活ができるのかと、決断するのに悩んだ。もし、今の人たちもその感覚が変わらないとすれば、凄く残念に思うので、どんな社会にしていけば良いのか考えていきたい。
- ・北陸は、食の豊かさではどこにも負けないし、自然の豊かさも強み。これが北陸ブランドでは。

[三浦委員]

- ・フェムテックに関しては、もう既にいろんな会社がいろんなことをやっているため厳しいので、精神的、社会的な切り口で考えていけば良いのでは。
- ・立山は江戸時代まで女人禁制の山であったが、立山の地獄図である立山曼荼羅を御札にして、地元の砺波平野の農家の方が、冬の副業として、関東地方や中部地方の女郎屋に売りに行った。その御札を何枚か置いてきて、ワンシーズンが終わった時に、何枚御札が無くなっているかということでお金を貰った。これが今の富山の越中売薬のビジネスモデルになったとのこと。そういったことを考えると、精神的、社会的なことの中では、北陸は江戸時代からフェムテックをやっていたのかもしれない。ものづくりだけでなく、もう少しいろんな原点を考えてやってみれば、いろんな形のビジネスモデルもできるのでは。これをきっかけにして、北陸から発信して行けばよいのではないか。
- ・テクニックだけではなく、フレイル的な考えで、精神的、社会的な面も含めて、他ではやっていないようなことをこの北陸から発信することは、まさしくウェルビーイングに繋がる。

[森田委員]

- ・立山信仰には、必ずしも女人禁制を良しとするわけではなく、逆に女人救済の道があり、その女人救済の道というのが、布橋灌頂会（ぬのぼしかんじょうえ）という3年に一回開かれる儀式で、前田の奥方様も参加していたとのこと。そういう女性救済の道もあって、フェムテックは必ずしもテックに拘る必要はない。

[西根委員長]

- ・確かに文化や歴史といった温故知新の中に「実は北陸地域においてフェムケアを考えていく筋があった」として発信することは重要である。

[進藤委員]

- ・一般的にフェムテックを日本語に直したら何て言うのか。みんな理解してないのでは。私も今回初めてフェムテックという言葉に触れたが、そういう言葉が浸透すると、だいたい実行されている、という目安になる。
- ・こういう会議をやると、必ず福井らしさや北陸らしさに拘るが、そこに拘らないといけないのか。これは北陸ブランドなのだという、そのブランドを作りたいのか。その辺が問題になる。

[西根委員長]

- ・ブランドを作る時に必要なのは、機能的な価値として、フェムテック、テクノロジーがあり、加えて情緒的な価値として、北陸らしさがあること、この二つの価値をもって、ブランドができる

はず。情緒的な価値とテクノロジーのチェックという機能的な価値を合わせることによって、物語を作ろうということなので、どちらかだけを外してしまうと、バランスが崩れてしまうことがあるので、両方とも保っていききたい。

- ・このフェムテックという言葉在世の中に出すかどうかについては、業界用語のため、一般の方には、産活、妊活みたいな形で、分かりやすい言葉にして、皆さんにシェア、活用していった方が良いので、我々が外に出す、プレスリリースを出すことも含めた時の用語は、変えるというか作るべき。

[前田委員]

- ・フェムテックを一般的に言うと、やはり社会的な面や機能的なテクノロジーの面が先に出る感じの言葉だと思う。この割と表層的・顕在的なニーズに対して、何かテクノロジーで解決していくというような意味が強いのかなと思う。
- ・ウェルビーイングよりの存在価値や目的行動の事例として、フェムテックのビジネスに投資をするフェルマータという会社を興している友人がいて、大阪の心斎橋のパルコに医療モールを作った。そこに行くと、健康課題、例えば、生理の問題、セクシャルウェルネスの問題に関する展示がされており、あれを見ると、ある意味センセーショナルにそういう場所を作ったと思うが、男性だと引いてしまう人も結構いると思われるので、もう少し上手いやり方がないかと思っていた。
- ・別の友人の産婦人科医が、子育てサポートで「あずかるこちゃん」という病児保育を利用しやすくするアプリを作って、自治体と契約している。病児保育は非常に書類が多いので、電話予約もアプリで自動的にやれるような、フェムテックと言えばそういうイメージを持っていた。

[西垣委員]

- ・中央で実施していたフェムテックサポートを地場でどうやってやるのだろうと、関心を持っている。ウェルビーイングをテックだけではなく、精神的、社会的な面まで広げて、ユーザーサイドの視点も取り入れるというところが、大変良い取組と思っている。
- ・男性社会の中で仕事をしてきて、色々な壁があったが、テックで乗り越えられる壁もあるかもしれないが、風土や文化が変わらなくてはならない。専業主婦がいる男性をベースにした働き方が高度経済成長において出来上がり、そこに男女共同参画だと言って、女性を入れたことでバランスが崩れた結果、少子化になり、人手不足になったことで高齢者や女性を充てたというのが間違いである。働き方改革をせず、人手不足だから活躍してねとなったことで、色んなことを背負ったまま今に至っているということではないか。2030年の姿を考える時には、今の延長線上ではない、全く違う社会観を言わない限り日本は変わらない。
- ・デジタル化されたことによって、女性だけではなく、男性も働きやすくなったはず。家に居ながら仕事ができるようにしたのがデジタルだとすると、コロナ禍が明けて職場へ戻れという企業に対して、辞めるという若い人が出てきている。デジタルによる働きやすさを知ってしまった人は、もう元の働き方に戻れないということ。
- ・女性が管理職になりたくないというのも正しくて、男性の働き方をベースにした管理職像を考えると、なりたいたいと思う訳がない。それは女性の問題だと言われると、そもそも男性の働き方は、皆が働きたい姿なのかと、男性も思っているはず。女性が働きやすい社会は、男性も働きやすいという合意が出来るくらい、今の世の中の価値を変えるようなことが必要だと思っている。
- ・社会が変わらない中で、女性が自分の健康や精神的な満足度を含めてバランスをとるのに苦労し

てきた時代が続いてきて、最近はそこで苦勞しなくてもいいじゃない、もっとこうなればいいじゃないというビジネスが出てきたし、そういうことを言う女性も出てきた。社会的に活躍している女性が増えてきたので、ずいぶん変わってきたと感じている。それを今あえてもう一回フェムテックとして、北陸からというのは凄く難しい課題だ。

- ・北陸にはもともと、富山の置き薬のビジネスモデルになったストーリーが残っているように、現代版北陸フェムテックとして、新しいものを作るというよりは、既にあるものを活用する等、うまく紡いでいくのが良い。

[西根委員長]

- ・先ほどのパルコの医療モール(Welpa)の企画を手伝ったが、女性の健康を考えるうえで、一番入りやすいパルコを入り口にして、松坂屋や大丸の方にも展開しようとするもので、優先順位化の話もあったが、女性全体の中において、誰がそこを考え始めて、社会が変わっていくのかを考えていくことが重要で、社会的な変革も含めて、フェムテックが関与していかななくてはならない。

[松原委員]

- ・福井の課題は、女性の就業率が非常に高い一方で、管理職の比率が低いこと。このギャップをどう埋めていくかが、重要な政策課題であり、研究課題でもある。まだまだ勉強不足ではあるが、一つは、家族関係の中で三世帯もあつたりすると、おばあさんとお嫁さんとの関係で、家にいるよりは働きに出るといった要因が結構あると聞く。女性が専業主婦というのは少ないが、専業主婦が地域社会に関わるというのは難しい部分もある。そういう面では、女性がおかれている地域社会との関係や家族関係というような、社会学的な問題になるのかもしれない。福井に限らず、北陸はそういった特性を持っているのではないかと思うので、そういうところからフェムテック産業のあり方を考えていくというのはあるのかもしれない。

[西根委員長]

- ・少なからず、この社会的な構造にフェムテックが関与できるのかみたいなことで、その結果として、女性の健やかで幸せが生まれれば良いと思う。

[森田委員]

- ・生理の貧困を富山から無くす取組を立ち上げようとしている。県内全ての女性トイレに生理用品を備え付けることが、ウェルビーイングにつながると考えている。
- ・北陸に女性が戻って来ないという課題を解決するには、働きやすい環境以前に、住みやすい環境が必要。そうすれば必ず戻って来るのではないか。ITを使うなど、いろんな情報産業とも連携しながらやっていけたら良い。
- ・北陸三県は、女性の就業率が75%以上と高い一方で、専業主婦のことを「遊んでいる」という言い方をする。以前、経営者協会が富山県内の2万人ほどの女性からアンケートを取ったところ「管理職になりたくない」が圧倒的に多く、その理由は「長く勤めたいから」ということ。「管理職になったら、長く勤めるにはきつく、どこかで折れてしまうのでは」という意識があり、管理職になりたくないということになる。就業率は高いが、働いてどうするのか、自己実現するために働いているのか、それとも働きに行って……。富山県は、男性のお小遣いが全国一とのこと。

[西根委員長]

- ・働くことによって自己実現できれば、幸福度が高くなるといった解釈ができるといい。

[日野委員]

- ・北経連では、少子化により働き手が不足している中で、女性をはじめとした色々な人材が活躍できるような環境を作っていないと、これからの会社経営は厳しいことを経営者の方に訴えている。
- ・特に課題は、北陸は女性の就業継続は多いが、管理職が少ない。管理職を打診しても断るケースが多く、その背景はいろいろあるが、自身の健康課題に起因して踏み込めないところがあるようだ。これを制度ではなく、テクノロジーで解決しようというのは新しい観点だと思う。
- ・北陸三県総じて幸福度ランキングの上位にいるが、以前、福井県が福井県内に住む女性の幸福度調査をインタビュー調査も含めて実施したところ、そんなに幸福度が高くないといった結果であった。外で働くのが前提で、家のことも仕事も全部当たり前で、仕事も長時間労働が評価される、一方で家のことも全部やらないといけない。夫は仕事が忙しいから早く帰って来ない、でもそういう働き方だからしょうがないと諦めて、そんな構造だから幸福度は高くないという結果が出ていた。一方で、自分の両親や夫の両親との関係性が良いと、有意にその幸福度が上がっているというような結果も出ていた。必ずしも同居である必要はなく、近くに住んでいて、ちょっとお願いするとか、そういった人と人の繋がりが強い。そういう支え合いがあって、現役世代の女性も外で働ける環境があるというのは、北陸の特徴の一つと感じている。

[西根委員長]

- ・アンケート調査で出た結果とインタビュー調査で出た結果は違うはず。インタビュー調査では、アンケート調査では掴めない、負を抱えているような意見がたくさんあったりするので、インタビュー調査だけでやるような幸福度調査は面白い感じがする。

[進藤委員]

- ・福井県がいつも幸福度ナンバーワンと言うが、幸福を感じるかどうかは心の問題なので、なかなか数値化は難しい。日本総研の調査では、幸福を感じるいろんなプラットフォームが揃っており、例えば、原子力発電所の立地により、昔からいっぱいお金が来ており、それで公園等いろんな施設がいっぱいできて、それが数値に現れてきている。でも、そんなに幸福なのに、なぜ福井県の人口はどんどん減っているのか。魅力度は下位の方だし、その辺をちゃんとやらないといけない。

[西根委員長]

- ・福井県の高浜町が、8月2日に「女性の健康課題と持続可能な地域づくり」という取組をフェムテック協会と一緒にやるらしい。福井県からは、未来創造部女性活躍課の課長が参加され、つまり社会的に考えていこうという現れだと思う。日本フェムテック協会ほかの資格を取るような形のことビジネスにしているので、我々はそこと手を組むのが良いのかは別問題だが、福井県でそういう話が特に高浜で起きているのは、面白いトピックだと思った。

[川上委員]

- ・森林資源を積極的に活用していきたいと考えており、例として、日本産の香料であるクロモジは、

殺菌効果や抗ウイルス効果が多く含まれているので、インフルエンザの時期に空間に広げると、インフルエンザの罹患率が凄く下がったり、鎮静効果もあるので肌が整って炎症が抑えられたり、夏場に汗をかいて、下着のところで化学繊維かぶれの痒みが治まったり、うがいをして歯肉炎や歯茎の腫れが引いたりなど、いろんな嬉しい効果がある。その資源の有効活用と、その効果がより良いアイテムとして、もっと生活に広まってくれると嬉しい。

- ・化粧品分野では、商品がたくさん出てくるが、もともとデリケートゾーンだったり、そういうところをケアする習慣がなかったりで、なかなか皆さんに浸透せずに伸び悩んでいると業界では言われている。給水ショーツや加齢と共に出てくる悩みに対するアイテムも多いが、なかなか伝えにくく、言いにくい分野でもあり、女性の中では共有して情報を集めたいが言えないという状況だと思う。
- ・フェムテックは、東京の方でもまだ1割以下の人しか知らない分野なので、北陸だと情報が入ってくるのが遅いので、ほとんどの方は知らない。性には、恥ずかしい、いやらしいといったマイナスイメージが付きやすいが、ジェンダーの時代でもあるので、みんなが過ごしやすく、認めてもらえる社会、若い人たちが暮らしやすくなる情報を発信して、みんなに知ってもらうことは凄く良い。

[西根委員長]

- ・女性の健康、健やかで幸せを考える中において、若い女性向けというのが優先順位として高いというのが、考え方の一つとしてある。彼女らの中でシェアしたり、配信したり、発信したりする能力があれば、社会価値化しやすいこともあると思う。
- ・デジタル社会ではあるが、北陸にはやはり北陸の時間のものさしがあると思う。事業を支援する時に、その地域の時間のものさしに合わせて、持っている知財、技術、考え方を入れていくことはとても重要だと思うので、北陸の時間のものさしを基にして、北陸のフェムテックを考えていくことができれば良い。

[西垣委員]

- ・北陸に来て感じたことは、家事支援サービスや育児支援サービスが凄く弱くて、単価は安いのに利用しないことの不可思議さだった。一方、石川県は女性の家事時間と男性の家事時間が最も違い、全国最下位。即ち女性が凄く家事をしている。男性が凄く働いていない訳でもなく、女性が家事をいっぱいして、でも就業率が高い。そうすると普通は家事を外部化するのが経済的合理的なはずなのに、なぜかそれが行われていない。それがずっと疑問で聞いてみると、周りの目や夫の目と言うより、お姑さんたちの目があるので利用しないとのことで、家事支援サービスを受けるということに対する古い慣習が強い。それを裏返すと、先程の「専業主婦は遊んでいる」という議論と表裏一体で、専業主婦の家事時間の経済価値に対する認識が低いのだと思う。例えば、奥さんが入院して「クリーニングはどうする」となった場合、外部化した瞬間に1時間2000円とか平気で払うと思うが、奥さんの仕事が忙しいから「1時間2000円で家を掃除して欲しい」と言うと、「えっ」となる。家事時間に対する経済的価値をもう少し考えないと、女性が働く方での自己実現はできても幸せではない、とにかく忙しい忙しいということになる。

[西根委員長]

- ・急には家事時間を変えるようなことはできないが、家事時間に対するフェムテックの介入はでき

るはず。この北陸フェムテック研究会の中において、女性の家事時間に対するフェムテックの介入支援は、明らかに北陸地域における女性のウェルビーイング、健やかで幸せには寄与するだろうという文脈が生まれたと思うので、しっかりとメモしておきたい。

6. 連絡事項 [事務局宮西]

- 次回の予定について、第2回目を8月24日(金)10時から12時、第3回目を10月の13日(金)10時から12時。いずれもオンラインで開催する。
- 第4回は、11月に予定しており、日程は未定。決定次第お知らせする。

以上

『第2回 北陸地域におけるフェムテック産業振興の可能性研究会』議事録

日 時： 2023年8月24日(木) 10:00~12:00

場 所： オンライン

出席者： 西根委員長、委員9名(欠席2名[西垣委員、松原委員])、オブザーバー・傍聴者18名

内 容：

1. 「第1回研究会の振り返り」「第2回研究会の論点」説明 [事務局 福井 幸博]

⇒添付資料-2に基づき説明

2-(1) 第1回研究会欠席委員[篁委員、長谷川委員]の自己紹介

2-(2) プレゼンテーション

① 「バイオデザインアプローチの紹介」[前田委員]

⇒添付資料-3に基づき説明

【主な質疑応答】

[西根委員長]

- ・バイオデザインにしても、プロジェクトデザインにしても、ニーズ探索の必要性が非常に重要。
- ・不満や不安の“不”がつく言葉や未達の“未”がつく言葉、“無”がつく言葉等、不、未、無が何かを探り当てないと我々のプロジェクトやデザインは全て違う方向に向かってしまう。

[長谷川委員]

- ・今、SHIBUYA QWS (渋谷キューズ) が注目されている。スタートアップの方が多く集まり、そこで、自分が困っていることを他の方々に相談できる仕組みで、そこにはコーディネーターが3人程おり、そこに集まっている方がどんな仕事をして、どんな専門性があるかを把握している。このような場が非常に重要だと考えており、当プロジェクトも目標は産業の集積ということで、やはり最後はリアル対面で聞きたいことが聞ける場(もちろんウェブでもよい)を設けた方がよい。
- 一番の課題は「何をして欲しいのか分からないこと。」自分が困っていることだけは分かっているが、それをどのように解決するかが分からない。そこをうまくコンパイルできるような人がその場で情報収集して解決できるワンストップの場ができるとよい。

[前田委員]

- ・バイオデザインの方でも、プログラムに参加する女性比率を高めようと調整した結果、50%を超えた。やはり女性の比率が高まると、女性のウェルビーイングに対するニーズや課題を正確にとらえられるようになった。

[西根委員長]

- ・研究会の中でも、スタンフォード大学のデザインスクールのような顧客体験の場をどうやって創出するかが課題になってくると思った。

[篁委員]

- ・北陸でも以前、ライフサイエンスクラスターで、産業系と医学系、生物系が一緒になって何かを開発しようとブレインストーミングを繰り返したが簡単ではなかった。前田委員がこれまで成功してきたのは、前田委員のチームがその現場に乗り込み、ニーズを聞いて、そこで生まれたものが多いのか、全く違った視点からチームが乗り込んでいって提案したものが多いのか。先ほど例

として紹介された外科医の手術器具は、もともと潜在的なニーズにあったものを拾い上げたものだと思うが、思いがけないものが出た時は、実際にはどこからアイデアが生まれてきたのか。

[前田委員]

- ・専門の領域の先生が自身の専門領域のデバイスを開発すると、ニッチなニーズに向かう傾向があるが、他の領域の先生が外側から見た方がニーズに気づきやすく、そういう事例が多い。

[笹委員]

- ・そういうマッチングをすることで、異分野からの連係で生まれたものが多かったということは凄くよく分かるような気がする。

[西根委員長]

- ・第1回の時にフェムケアやフェムテックという言葉は初めて聞いたとの発言があったが、そういう方々から見たフェムケア、フェムテックの考え方も我々の中でしっかりと入れていくことが重要。

②「経済産業省・フェムテック等サポートサービス実証事業の成果紹介」[宮本オブザーバー]

⇒添付資料-4に基づき説明

【主な質疑応答】

[西根委員長]

- ・先ほど前田委員から、顧客体験の中で、ナラティブベースの重要性をニーズから探るという話があったが、宮本委員からは、実証プログラム、つまりエビデンスベースの重要性を語っていただいた。このナラティブはエビデンス自体に寄り添ったものでないといけないが、これを両立させることはなかなか難しい。両方共必要なことだということが分かったので、今日のお二人の発表はとてもためになった。

[三浦委員]

- ・この研究会は「ものづくりをしていく」ということが出口なのか。冒頭の事務局説明に4つのKPIがあったが、必ずしもものづくりだけではないような気がする。
- ・例えば、低用量ピル処方をやろうと思えば、残念ながら石川県にはできる企業はほとんどないが、導入すればできるし、海外のものを並行輸入すれば山ほどできる。デバイスと絡み合わせてやろうと思えばできるが、体外診断用医薬品の許可を取る必要があり、数年単位でやらなくてはならないが、本当に大真面目にこの研究会でやるのか。地元企業と協業体制と一緒に北陸でやるんだという強い意志があるのか。疑問に思っている。
- ・ニーズ、シーズは色々あるだろうが、ものづくりに関しては、時間とお金がかかるということを考えると、本当にこの研究会として提案はできても、社会実装までできるのかという疑問を感じている。
- ・別件だが、今朝の北國新聞に石川県教育委員会が、産休から復帰した女性教員の休憩室を作るということで、50万円を上限として、備品を整備するための補助金支給対象者に選ばれた(全国10の教育委員会)とのこと。我々もものづくりでいくのか、それともこうした違う面で行くのかを、もう少し情報収集して、この研究会でどこまで出来るのかをきちんと考えないといけない。

[西根委員長]

- ・事業化として、商品を作っていくのか、あるいはサービスやシステム作りになるのか、施設造りになるのか。そのいずれかになると思うが、実現しようとなると、ものづくりのハードルは確かに高い。サービスやシステム作りにフェムテックを介入できる優先度が高いと思っている。

[川上委員]

- ・女性側の意見として、女性の体と男性の体では仕組み違う。女性が働きやすい環境をサポートしてもらえるものを開発してもらえるのは凄く有難い。
- ・最近月経カップを使ってみたら、凄く快適だった。女性に役立つものが出てくるのは大変有難い。
- ・前回勧めていただいたポッドキャストの「OVER THE SUN」を聴いてみた。中でも宋美玄（そん・みひょん）先生の「聴く婦人科診察室」は、リアルに女性の体の悩みから生活の悩みなど、女性にとっては、悩みは軽くなるし、男性にとっては「この女性は何で困っているのか」が分かるようになる番組だと思った。
- ・結婚して一緒に暮らす中で、男性も女性も働きやすくなるには、家庭での男性のサポートにより女性の役割を減らすことが不可欠。

[西根委員長]

- ・月経に対してカップというものが出た。選択肢が増えるということはとても重要かもしれない。フェムケアやフェムテックを考える中で、体の悩みと生活の悩み、生活の悩みと体の悩み、この表裏一体の関係をどうやって我々が把握して、フェムテックの導入につなげるかが大切。

[森田委員]

- ・若い頃に月経痛で悩んでいたことや、不妊で悩んでいる人の相談、女性が働きやすい環境を提供したいとの思いで、女性医師や大学病院の先生の協力を得て、無料で直接先生方に相談できる「富山ウーマンネット」というシステムを20年前に作ったが、なかなかうまくいかなかった。今思えば、ちょっと早すぎたのかなって。インターネットが始まったばかりで、フェムテックという言葉もなければ何もなかった。今後、可能であれば、またやりたいと思うが、宮本オブザーバーが言われたような自治体等からの支援は受けられるのか。

[宮本オブザーバー]

- ・フェムテックサポート実証事業は、2021年度から始めて今年で3年目。来年度の予算要求の話はまだないが、非常に大事な分野と認識しており、引き続き予算確保され、事業を継続してもらいたいと思っている。私の方からも色々と情報発信していくので、こうした事業を活用しながら今の時代に合う、仕組み・システムをあらためて構築いただければと思う。

2-(3) 自由討議 [西根委員長⇒事務局説明資料-2に基づき、本日の論点を説明]

[西根委員長]

- ・宮本オブザーバーに事例紹介をいただいたが、商品やサービスは大きく2つに分かれ、「B to C」のコンシューマー向けと「B to C with D ドクター、B to C with 専門職とか専門家」という「to C」の後にwithが付いているのが特徴的だと思った。「to C」だと、どうしても物作りや、何かに寄り添ってしまう可能性があると思うが、「With な

んとか」だと、そのサービスモデルも含めながら、もう少し広くこのフェムテックを考えられるのかなと思った。

- ・事務局説明資料-2の最終ページに記載した「KGI」と「(最低限必要と思われる)KPIの4項目」は、事前に私と事務局で議論して掲げたものだが「KPIはこの4項目の他に抜け漏れはないか。」を皆さんに確認したい。

[参考:詳細説明]

- ・KGIとして何を目標とするか、それに向けてバックキャストし、そのKGIに到達するには、どのような要件定義が必要かをKPIとして“フェムテック産業集積に向けた論点”という形で記載した。
- ・我々は、女性の健康に関する様々な社会的な課題があることに気づいた。これを背景に、フェムテックの事業化を通してソリューションを提供している。ここにはもの作りもあるだろうし、サービス作りや施設づくりもあるだろう。それらの産業を集積し、地域社会の持続的発展に貢献するための2030年頃のありたい姿を理想形としてKGIとして定めた。
- ・KPIの1番目は「地域資産や人的資源を最大限に活用しよう。」とした。具体的には、地域の特性を生かしたフェムテックブランドを作り上げるためとした。
- ・2番目のKPIは「女性健康に関わる新たな価値を創出しよう。」とした。今まで女性健康に表層的に答えることが多い傾向にあったが、それをもっと深く深層的に捉えるべきで、体だけではなく、生活までも含めるべきとした。
- ・3番目は「個社や業界、県境の壁を越えた連携の実現による知識や技術のオープンイノベーション」とした。地域が競い合うのではなく、共に作り上げていく共創が重要。
- ・最後の4番目は「Femtech as a Serviceの構築に向けたデジタル技術等の活用。」とした。ものづくりを考えた場合、今まで「as a Service」までは行きつかなかったが、ものづくりに偏るのではなく「Femtech as a Service」として捉えていけば、何かそこに関係するプラットフォームを作っていけるとした。
- ・今後の研究が進むにつれ、第3回はこのKPIの何番かに関してのご発言・ご発表をいただき、議論を進めていこうと考えている。

[前田委員]

- ・KPIの5番目になるか分からないが、そもそもフェムテックに対する認知度が低い。これは世界、日本、ひいては東京もそうだと思う。北陸三県を考えた時に、住民の皆さんや企業の皆さんの認知が高まっている状態が非常に重要。
- ・女性のウェルビーイングは、社会のウェルビーイングに繋がると思うが、そもそも認知や意識の向上が前提にないと他のKPIが達成されないという気がする。

[西根委員長]

- ・とても重要な論点。我々が提供するものに対して、地域の方々が地域社会としてどのように受けとめてくれるかを考えると、フェムテックそのものの認知と意識の向上、普及啓発と言うものを分けていくべきかと思った。
- ・以前、事務局とプレスリリースをいつ行うかを検討した。それが結果として得られた時に出すべきなのか、それとも、我々が研究会を立ち上げたということが重要なのかも含めて、前田委員からの意見は今後につながると思った。

- ・ 篁委員は糖尿病に関するいろんな普及啓発を実施されているが、どう思われるか。

[篁委員]

- ・ 普及啓発は大事だと思う。フェムテックがどこまでを含むのかが曖昧なので啓発は必要。例えば、少子化対策までを本当に含めるのか。女性の健康に直接関わるわけではないが、人類の存続や国の生産性など、いろんな意味で重要な意味を持っており、それに就労やキャリアサポートとも無縁ではない。少子化対策は4つのKPIに入っていないと思うが、これを含めるのかどうか。
- ・ 女性のもう一つ大きな問題は、健康寿命が短いこと。閉経後にガタガタときて、長生きはするが、最後の10年間や20年間は不健康なところは男性より長いので、閉経後の女性の健康をサポートするという女性ならではの医学、健康をサポートするというようなことも含めるのかといったことも話し合う必要がある。

[西根委員長]

- ・ 普及啓発の話が出たが、櫻井委員と日野委員には、地域における女性並びにパートナー、家族、地域、学域を広く考えながら、そこに対するフェムケアやフェムテックの普及啓発の重要性や考え方を意見としていただきたい。

[櫻井委員]

- ・ フェムテックもそうだが、そもそも男性は女性の体について、例えば、月経痛とはどういうものかさえ理解していないという気がする。人によっては排卵痛の方もいる。そういった状況自体も知らないと思うので、フェムテックの啓発と同時に女性の体はどうなっているか等の基本的なことも啓発していかないとなかなか進まない。これは4つのカテゴリーには入らないと思う。

[西根委員長]

- ・ 私も厚労省の健康日本21第二次の始まりの時に感じたことだが、さまざまな健康課題に対して、気づく、気になる、分かる、そして始める、続ける。といった行動変容ステージのアプローチが必要だろうと。それには、その地域におけるフェムテック・フェムケアに関係する、気になる・気づくがどれくらいベースにあるかということが凄く重要。

[日野委員]

- ・ 実は今これだけいろんな製品やサービスがあり、もっと楽にできる方法があるのに、その情報が多くの方に届いていない。ということが大きな課題。前回の議論の中で、日本はヘルスリテラシー、特に若い方のヘルスリテラシーがあまり高くないとの指摘があったが、そういったところをまずやっていかないことには始まらない。KPIの4項目プラス1として、フェムテックそのものの認知や意識向上、普及啓発という項目は入れておく必要がある。

[西根委員長]

- ・ これは、五段階の行動変容ステージを樹形図にしたものだが、「気づいているが分かってない」、つまり関心期みたいな方々が、優先的にはきっと順位化されるのだろうと。気づいているが分かってない。どうすればいいか分かってない。何がどうか分かってない。そういう方々の“不”“未”“無”に対するこのフェムテックの介入は何なのかという考え方もある。

[聴講者]

- ・ KPI の 1 番目で、なぜフェムテックが北陸にとって重要なのか。地域特性を活かしたフェムテックブランドとはどういうものを指すのか。地域特性というと、特産物や昔からの技術といったイメージが強いが、これがフェムテックブランドにどのように影響をもたらすのか。

[西根委員長]

- ・ 地域特性の中には、例えば、地域の自然や文化、産業、特産品を活かす、例えば、地域の研究機関や専門家と連携する。例えば、地域の教育機関や教育者、関係人口からの協力がある。などを議論の項目として記載したが、これが決定ではなく、議論を膨らませようと記載したもの。

[聴講者]

- ・ 骨盤底筋を強化するための器具を過去に見せてもらったことがあるが、おむつみたいで、デザイン性が凄く低かった。やはり女性が手に取りやすいものとは、デザイン性の高いもの。KPI の 4 つの目標は間違いないと思うが、女性特有の感覚的な嗜好みたいなものもあると思うので、KPI の一つに当てはまるのか分からないが、そういうのもあっても良いと感じた。

[西根委員長]

- ・ 前田委員からバイオデザインで、デザインスクールに顧客体験を提供する場があるとの説明があったが、そのような合意形成の場をなくして、我々が何かフェムテックを作っていこうなんてありえないとのこと。顧客体験の重要性やデザインスクールの事例があれば紹介してほしい。

[前田委員]

- ・ 私自身、北陸に住んではいないし、女性でもないということもあり、地域特性のところが、凄く気になっている。北陸の女性や女性の周りを支援している方にとって、地域らしい課題や解決策は何か、委員だけではなく、市中からも拾い上げられるような仕組みが必要だと感じている。
- ・ デザインも、そこに通じるものがある。先ほど「ものづくりを目指すのか」というコメントがあったが、私も必ずしも北陸でもものづくりが行われる必要はないと思う。例えば、他の地域で作られたものを北陸に持って来られた時に、検証して、そこに北陸らしいフィードバックができるかもしれない。これも地域特性としてのフェムテック産業の活性に繋がっていくと思う。

[西根委員長]

- ・ 第 1 回研究会では、KPI 2 番目の「北陸地域における女性のあり方」について、かなりの時間を割いた。その中で家事に対する考え方が、北陸はかなり偏ってしまっているとの意見があった。家事に対する介入支援ができるようなフェムテックが何かあれば、それが北陸地域における女性のウェルビーイングにつながるのではないかという議論であった。

[川上委員]

- ・ すごく女性に特化したような話だが、男性側からすると「男性ってちょっと損じゃないか」と思ったりはしないのか。

[西根委員長]

- ・私は全然思わない。今まで、健康診断や健康診査が男性優位の形で行われてきたことなどを考えると、ようやく真剣に考えるような時代になったと思うし、「健康日本 21(第三次)」においても、新しい取り組みの第一義を「女性の健康」としている。また来年度からは女性の健康を考えるナショナルセンターが、成育医療研究センターの中にできるようだし、今こそどんどん考えていくべきと思っている。

[長谷川委員]

- ・前回紹介いただいた「フェムテックを考える現代思想(5月号)」を読んだ。倫理関係の監査等を担当している自分にとっては、大変勉強になった。

[西根委員長]

- ・我々もどうしても思考が偏ってしまう可能性があったりするので、そういう書物や番組「OVER THE SUN」等で広く意見を聴くことが必要。

[篁委員]

- ・川上委員が言われたことは私も気になっている。例えば、学会等で女性だけの賞を設けたり、育児支援ばかりやると、アンチテーゼとして「なぜ女性だけなのか。」「逆差別じゃないか。」という感覚が出てくるし、例えば、育児している人を偉いと言ってしまうと、子供が欲しくてもできない人は、くすぶったような気持ちになってしまうということがあるので、フェムテックのプロモーションでも配慮しなくてはならないポイントだと思う。
- ・女性特有の月経関連で言うと、閉経後の女性の健康管理や心のウェルビーイング、マインドフルネス的な問題になってくると、女性の方が閉経後に凄く衰えてくるが、健康問題としては、高齢男性でも同じような問題なので、フェムテック関連の産業を発展させることで、一部は男性にもアプライできるものも含んでいるのだということも少し含んでおいた方が、社会的な支援も得られやすい。

[西根委員長]

- ・我々が議論する中で、何かしら世の中に出す時には、やはりコミュニケーションが凄く重要だと思うので、そのコミュニケーションの出し方や設計はしっかりと考えるべき。

[前田委員]

- ・委員やオブザーバーの皆さんはそうは思わない方が多いと思うが、私のプロジェクトでプログラムに参加する人を増やすための参考にアンケート調査を行っているが、女性の参加者から「会議の最後に自分がメモを取るよという圧力を感じた。」とか「会議終了後の片付けは自分がするものという圧力を感じた。」などのコメントがあった。男性にはなかなか気づかないもので、意識して啓蒙しないと改善できないだろう。
- ・我々がこの研究会で出した結論を世の中に出していくと、プレスリリースに対する反発の声も結構予想されると思っており、女性が活躍していくとか、女性のいろんな健康的な面で配慮しなくてはならないところもあり、それを我々がというか、社会としてというか、テクノロジーでサポートして解決していき、その結果、社会の活性化に繋がっていくのだというメッセージをうまく

伝えていかないと、アゲインストな声が出てきそうだ。

[西根委員長]

- ・「バービー(Barbie)」という映画が上映されているが、女性から見た世界観をバーチャルのバービーランドの中とリアルな人間社会の中でどうなるのかを描いているが、この見え方が全然違うわけですね。私は自身のフェイスブックの中で「女性社会学が唱えるいくつもの問題や課題が(映画の)深層に描かれているように感じた。」と書いている。つまり、見かたによって、その問題や課題の見え方が全然違って来るだろうと。たまたまこのバービーという映画がこのフェムケアやそういうテックを考えるにあたり、何か重要なものを世の中に提言してくれているのではないかと考えている。

[三浦委員]

- ・この限られた中で何かをやるということで、きちんとエンド目標を立てなくてはならないと思う。その中で皆さんの意見を聞いてみると、やはりフェムテックやそういったものに関する認知度の低さを一番懸念していると感じた。
- ・今回この研究会を北陸地区で作ったということで、少なくとも北陸からこうしたものを発信するということが、何かフェムテックに関する啓発的な、例えばポスターやハンドブックみたいなもので発信していくことを地道にやっていくことが必要では。プレスリリース受けも良い。
- ・私も当地に来て16年間、金沢骨を守る会で骨粗鬆症の啓発活動を行ってきたが、ほとんどの人は骨粗鬆症という言葉を知っているし、必要な三要素も知っている。ただ、それをどうやってやるのかを知らない、あるいは続けていくことがなかなかできない、というのが現状だと思うので、このようなことを起爆剤にして、何か啓発をできるような事があれば、石川県には女性のセンター等もあり、財団法人等も実際あるわけだから、そういうところと協業しながらやっていくことも必要だと思う。

[西根委員長]

- ・確かにそういう普及啓発があつてこそ、認知が高まり、治療の意欲も高まってくると思われる。我々の研究会からもポスターやハンドブック等を出していくことも、もしかしたら本当に重要なところかもしれない。
- ・プレスリリースをどうするかについては、第1回研究会の前に事務局と検討してはいたが、今、この議論が深まった中で「やはりプレスリリースは必要だ。と感じている委員は挙手をお願いします。【⇒出席委員9名中6名挙手】」今後、事務局と積極的に考えていくこととしたい。やはり我々の研究がこの中に留まっていれば何もできないので、我々がどうやって外部に発信・配信していくのかということも重要なテーマだと思った。

[日野委員]

- ・KPI から若干ずれるかもしれないが「男性から見て逆差別じゃないか？」の議論で、宮本オプザーバーからの丸紅の報告の中で、経済効果について記載されていたが、フェムテックを企業の福利厚生で導入していこうという動きがある中で、一方で、男性社員には何のメリットもなく逆差別ではと抵抗感のある企業があるという声を聞いたりもする。そういう中で、経済損失を数字だけで追うのはどうか。とは言え、こうした説明もやはり、それは社会全体にとってのメリットの

一つの手段だとも思う。特に今回は産業化ということで、お金の話は必ずついて回ることなので、こうした経済効果の視点は大事で、しっかりやっつけていかなくてはならないと感じた。

[西根委員長]

- ・確かにアウトカムの設定として、経済損失ないしは経済効果というものを出すことは絶対必要。同じような議論で、禁煙プロモーションがあるが、職域で行った時に、喫煙者に対してはアプローチがあるのに、もともと喫煙していない人たちに対しては何のメリットもないのではとの議論があったが、これをフェムケア・フェムテックで、地域だけではなく、職域に入れた時にも同じような議論が出てくることは間違いないと思ったりもする。やはりそれをもって、何が得られるのかという経済効果、あるいは利益効果というものも確かに出す必要があると思った。

3. その他

- ・事務局より第3回、第4回の開催日程について報告

◇第3回(オンライン開催) : 2023年10月13日(金), 10:00~12:00

◇第4回(ハイブリッド開催) : 2023年11月24日(金), 10:00~12:00

場所 : 石川県庁11階 1110会議室

以 上

『第3回 北陸地域におけるフェムテック産業振興の可能性研究会』議事録

日 時： 2023年10月13日(金) 10:00～12:00

場 所： オンライン

出席者： 西根委員長、委員10名(欠席1名[三浦委員])、オブザーバー7名、傍聴者8名

内 容：

1. 「第1回・第2回研究会の主要な意見を踏まえたフェムテック産業集積へ向けた方向性・第3回研究会の論点」説明 [事務局 福井 幸博] ⇒配付資料-2に基づき説明

2-(1). プレゼンテーション

「社会課題解決に向けたデザインの価値」について [西垣委員] ⇒画面共有資料に基づき説明

- 2-(2) 自由討議 [西根委員長⇒事務局説明資料-2に基づき、本日の論点を説明]

[西根委員長]

- ・西垣委員のプレゼンの中で、ヒューマンセンタードという言葉が出た。人間中心のデザインのある暮らし。我々にとって人間中心のフェムケアのデザインを考えていくうえですごく参考になった。そういう視点で、何を作れば良いかではなく、誰のためにどのようなデザインにすれば良いかを考えながら討議したい。

【KPI-1 について】

[西根委員長]

- ・まず、最初のKPI「地域資産や人的資源の最大限の活用」について考えていきたい。地域特性を生かしたフェムテックブランドを作り上げるため、人間中心のデザイン、女性中心のデザイン、家族中心のデザイン、家族の構成者のある意味のエクストリームユーザーのためのデザインなど、いろいろ考えていくと、いろんな発想が生まれてくると思うので、そのあたりを含めながら議論したい。

[長谷川委員]

- ・10月6日にビッグサイトで「食品開発展」があった。毎年行っているが、今年はフェムテックの言葉が約10か所の展示ブースにあった。かなり注目されていると感じた。
- ・女性の更年期や女性独特の問題について、大豆イソフラボン等を使って事業展開をしている企業もあった。この地域は、加賀野菜が特産であり、発酵も面白いものがある。伝統的な味噌や醤油、酒もある。新興勢力ではなく、伝統的な視点があったら面白い。

[西根委員長]

- ・確かに地域の資産や人的資源の中において、どうしても新しいものに目がいてしまいがちだが、北陸の発酵文化のような伝統的なものも何か寄与できるようなものとして魅せられる。
- ・北陸の伝統的・信仰的なものが、人間中心のデザインのある暮らしの中に入ってくれば良い。

[篁委員]

- ・発酵や腸内細菌医学の領域では凄く話題になっており、発酵食品によっては、いわゆる善玉の腸内細菌が増えるのかっていうところは競争も激しく世界中でやっている。北陸ならではの“いしり”や“独特の発酵食品”と腸内細菌との関連はまだ研究する余地がある。

- ・西垣委員のお話で、エクストリームユーザーからコアユーザーへというのは、前回私が発言したように、フェムテックを進めるにあたり、何か逆差別的に感じるような人達も一部いて、フェムテックで女性のために健康を進めるものを開発したから、実は高齢者普遍的なメリットが出てくるとか、女性ホルモンを促進することになるとかなり絞られてくるが、例えば骨粗鬆症や女性は寿命は長いが健康寿命は短く、それが寝たきりや認知症になっているので、サルコペニアや骨格筋をどうやって増やしていくかということ、女性のためと言いながら、実は普遍的な高齢者医療への貢献になったりするようなテーマをある程度優先的にやっていくのが良いと感じた。
- ・過保護な状態や行き過ぎた抗酸化療法等が、かえって健康を害しているところがあり、運動は適度なストレスなため、そのストレスを増強することで、人間はヘルスプロモーションをやっている、あえてストレスで体をいじめていくみたいところで、体制をつくっていくというような医療をやりたいと思う。そういうところは、女性の骨格筋や骨を強くする。ひいては高齢者の医療に貢献していくと考えている。

[西根委員長]

- ・北陸地域の人的な資源を生かして、それがデザインのある暮らし的なものに投入できるとすれば、どのような人的な資源がこの北陸地域にあるか。

[松原委員]

- ・私が気になったのは、北陸が全国的・世界的にどのような立ち位置にあるのか。特にフェムテック産業の集積を作っていく上で基礎となる研究機関がどの程度北陸が優位性を持っているのか。全国的に見てどうなのかは気になる。全国的にフェムテック産業の可能性・優位性があるようなところとはどういうふうに考えたらよいのか。福井で言うと、県立大の場合、例えば看護福祉学部に研究者もいるが、工業技術センターなどは新しい産業分野なのでなかなかいない。どういう学部や大学院、試験研究機関がどうなっているのかを把握していないので、情報共有できればと思う。

[森田委員]

- ・若い女性が帰って来ない。働く若い女性が少ないということがあって、これを解決できないかと各経済団体で取り組んでいるが、女性市場をどうにかしなきゃいけないという部分についてはなかなか見当たらない。逆に言えば、そういう部分をもっと作って広めていくことで、若い女性たちが帰って来るような部分ができると感じている。

[西根委員長]

- ・これまで数年にわたり、北陸三県でのヘルスケア事業に携わっているが、それぞれ導く力が違っており、富山県は企業、石川県は学術、福井県は自治体行政が先導している。
- ・今回KPIの1番の中で導かれたことは、地域特性を生かした地域資産は、伝統的なことも含めていくだけでも出すことができるかもしれない。しかし人的資源については、我々の情報が不足していることもあり、どこにフェムケア、フェムテックの研究を導いてくれる人達がいるのかを踏まえながら取り組む必要があるとの課題が出た。

【KPI-2 について】

[西根委員長]

- ・女性健康に関わる新たな価値の創出。女性健康を表層的に捉えがちだが、深層的に捉えていくことが最も大切。仕事や社会進出、家事、心の中における自己肯定感、自己効力感、自己実現力、女性が住みやすい、暮らしやすい、安心安全な地域づくり等、女性健康の考え方について議論したい。

[川上委員]

- ・女性が活躍できるには、女性が家事をしないといけない等、昔からある男女の役割分担が平等になっていかないと実現は難しいと思う。男女の体の差は仕方がないと思うが、ジェンダーの時代なので、企業でも家庭の中でもお互いが平等に協力していけるような形になったら良い。

[西根委員長]

- ・キーワードとして役割分担の話が出た。役割分担となるとどうしても男性が、女性が、という見方になってしまう。一方で最近の言葉に、共に創る、共創がある。役割分担ではなく、役割共創としたらどうなのかと思ったりした。何か追加コメントはないか。

[日野委員]

- ・KGI に掲げた 2030 年のありたい姿。私は、経済団体に所属していることもあり、「女性の経済的な自立」「社会的地位の向上」を目指していきたいと考えている。
- ・男女の賃金格差は、女性管理職が少ないことや、出産等でキャリアが中断し、再就職の際に一定賃金の仕事にしか就けない、賃金の高い仕事に就けるようなスキルや経験・教育を受けていない、若い頃の仕事で成長する場を与えられていなかった等が要因としてあったと考えている。
- ・この二つの課題でのネックは「経済的・時間的なゆとりがあるかないか」ということ。「女性の方がうつ病が多い」という話があるが、その原因は、女性の方が経済的なゆとりや仕事・家事の両方で悩んだりすることが多くて鬱になりやすいとのこと。これをなんとかしたい。
- ・企業として、長時間労働の是正は絶対に必要。時間を作ろうとした時に、家事を分担することも必要だが、そもそも家事の作業を減らすことが、男女共にハッピーな方法だと思う。いろんなロボットや外注サービス等を活用する等、見直すことで変わっていく。

[西根委員長]

- ・名古屋でフェムケア、フェムテックを研究している知人は、フェムケア、フェムテックを考える上で、自分で立つ「自立」と自分で律する「自律」の二つの「じりつ」がキーワードとして必要だと説いている。「経済的な自立」「時間的な自律」があると思った。

[進藤委員]

- ・私のところは IT 産業。基本的には地方に就職する人を見た場合に、女性の方が優秀であり、そういう意味で賃金の格差はない。またマネージャークラスも充分にいる。それで地方の IT 業界は成り立っている。そういうことを考えた場合に、これから提言書を作っていくと思うが、北陸だからこそのことを明確にしないといけない。決して派手ではないが、やはりそれがキーポイントになる。
- ・この提言書の後にいかに実行するかという実行力が大事になってくる。今、北陸三県で、女性の

副知事が各県におられる。副知事をヘッドにして、女性の婦人科の先生や大学の先生、あまり男性を入れずに、実行するための仕組みを作っていくことが、いろんなKPIを達成するために一番重要なことだと思う。

[西垣委員]

- ・昨年、三県副知事会を立ち上げた。当時、福井は男性の中村副知事だったが、中村さん呼び込んで、富山の横田（美香）さんと3人で三県副知事会を何回かやった。今年の夏に鷺頭（美央）さんが着任され、先々週に三県副知事会をやったところ。三県副知事会では、それぞれの得意分野、横田さんは農林水産省出身、私は経済産業省、鷺頭さんは総務省なので、自分たちの専門を生かしながら、各県の課題について情報共有を進めている。
- ・石川県での久しぶりの女性副知事ということで、金沢大学や保健センターなどの女医さん達から、病院や大学の垣根を越えた女性医師の会に呼んでいただいている。厚生労働次官・村木厚子さんの来県に合わせて呼ばれたのがきっかけで、女医さん同士のネットワークの強さを感じた。女性経営者とも同様にこのような関係を築いており、女性同士の共創の基盤としている。これは東京では無理で、人口規模が富山・石川100万人、福井が75万人だからできる気がする。

[前田委員]

- ・一般的にフェムテックと呼ばれている具体的な解決策やサービスは、日本で実際に展開されている領域はKPI2の部分だと思う。「保育テックのあずかるこちゃん」や「生理時に仕事がしやすいようなテクノロジー」「顔の悪性腫瘍をリハビリメイクして、もう一度社会進出を促す」などの具体的な解決策がいくつか提示されている。
- ・一方で非常にエビデンスレベルの低い美容系や、ある程度構築されている再生療法みたいなものが混在していることから、エビデンスを作る活動を後押しするプラットフォームが求められているのもこの領域。今、いろんなサービスや製品が集中しているので、他のKPIから北陸というストーリーを他のKPIで打ち出すことで、エビデンス構築やその評価がこの地域に導入されると、女性の健康促進、社会的健康の促進というものが、数字等で評価として打ち出せる。必ずしも北陸産のものを使わなくても、北陸のストーリーと世界中日本中から出てくるようなサービス製品を評価するようなプラットフォームがあると、特区構想などにつながってくると思う。
- ・フェムテックにおいてメンタルヘルスが新しくかつ非常に重要な一つの領域として打ち出されてきている。メンタルヘルス=自己肯定感というわけでもないが、先日のフェムテック東京でもいくつかメンタルヘルス系のサポートがあった。メンタルヘルスに関しては一つ大きなキーワードにはなっていると感じた。

[長谷川委員]

- ・北陸には、このエリアを共通するような概念・理念として伝わる「土徳」という浄土真宗の教えがあり、いろんなものづくりや行動などの指針になっている。共通プラットフォームとして、こういう土徳の考え方を持っているエリアだから、こういうものが出てきたのだというストーリーにすると良さそうな感じがする。

【KPI-3 について】

[西根委員長]

- ・ 一個人が、一企業が、一つの県が、ではない、ウェルビーイングを向上させるフェムテック、善循環・好循環を創出するフェムテック、国際的に通用するフェムテック、団体、専門家専門職が集まる団体設立による共有や強化について議論したい。

[松原委員]

- ・ 以前、経済産業省の地域未来社会の関係で、北陸産業活性化センターと工作機械産業での連携支援計画を立ち上げたことがある。フェムテック産業をキーワードにして、協議会を作り、北陸三県の連携支援計画を作り上げるのは一つの可能性としてある。

[西根委員長]

- ・ 今「北陸フェムテック研究会」になっているが「北陸フェムテック産業協議会(仮)」みたいな形になると、こういう産業や研究者も含めながら、いろんな形での共創ができるのかなと思ったりする。
- ・ オブザーバーの方々からもご意見をいただきたい。「北陸フェムテック産業協議会(仮)」について、具体的な思いをお聴かせいただきたい。

[石川県 亀田氏]

- ・ フェムテックに関しては、今回、北陸産業活性化センターを通じて、これまで取り組んでいなかった研究会に参加させていただいた。これきっかけにして、まずは県の商工労働部局や健康推進部局と連携を進め、協議会の設立や計画作成等の可能性がないかを前向きに話し合っていきたいと考えている。

[富山県 佐藤氏]

- ・ フェムテックについて、ヘルスケア産業の創出の一部として、昨年度から取り組んできたところ。連携支援企画や協議会というものの具体的なところがよく分かっていない。まずは、とやまヘルスケアコンソーシアムの成果について、検討する必要があると考えている。

[西根委員長]

- ・ 「北陸フェムテック産業協議会(仮)」ができれば、きっとそこに分科会ができるのだと思う。「フェムテック×商品」という分科会や「フェムテック×サービス」という分科会、「フェムテック×施設」という分科会など。それらでの議論の中で、今度はそれらをマッチングしていく「マッチングプロジェクト」が始まり、その中からいくつかの事業化が起こってくる。その事業化が北陸三県の中で広がっていくことによって、北陸におけるフェムテックの産業化が出来上がるのだらうと思う。

[福井県 橋本氏]

- ・ 特にフェムテックに注目した活動は行っていないが、今回このような枠組みで話を進めていることもあり、石川県、富山県と足並みを揃えて活動していかななくてはならないと考えている。

[西根委員長]

- ・フェムテックとの関わりがあるかどうか分からないが、同じ福井県内の高浜では、フェムテックに関する団体が活発に活動を始めたりしている。

[福井県 橋本氏]

- ・福井県の他の部署では、未来創造部に女性活躍課という部署があり、そこでは家事の役割分担について、表にまとめて不平等感をなくすような取り組みをしている。他の部署でも関連する事業を進めている可能性があるかもしれない。

[中部経産局北陸支局 宮本氏]

- ・北陸地域を預かる立場として、三県が一体的に動く、共創強調していくという枠組みは凄く大事だと認識している。
- ・ヘルスケア、特にフェムテックは、全国的にもフォーカスして取り組んでいる地域はあまり無い。こうした新しい産業へのアプローチ、チャレンジをやっていく価値は十分にある。
- ・フェムテックはテーマに関して言うと、スタートアップ企業に親和性のあるテーマなのだろうという意味から、協議会の全体であれ、分科会であれ、スタートアップとの協業を少し意識していくと、より具体的な活動になっていく。

[西根委員長]

- ・フェムテック、フェムケアを考えている自治体、行政として、神奈川県未病産業研究会(参画企業:約 1000 社)では、昨年度、フェムテックをテーマにプロジェクト創出を検討した。また、秋田県では、今年度、職域ヘルスケアにおける女性健康と若年層健康をテーマにヘルスケアビジネスを開発して実証する事業を行っている。というように、女性健康について事業化する動きが全国あちこちで出てきた。

[福井常務理事]

- ・先ほど松原委員から HIAC との連携支援計画の話が出た。前年度で完了しているが、この連携支援計画の一環として、北陸三県の IOT、AI 相談窓口の情報交換会を約 4 年間続けてきた。年 1 回、三県の担当部署の皆様が集まっていたら、各県の施策や導入を促進するための施設を紹介いただいた。フェムテックについてもそのような取り組みは有益だと思った。

[松原委員]

- ・2017 年に地域未来投資促進法ができ、2018 年から北陸三県の工作機械産業の国際競争力向上に関わった。IOT、AI 導入という形での連携支援計画は、国が承認するスキームになっており、北陸三県の産官学金が連携していくような形で、KPI も出していた。工作機械産業もそうだが、フェムテック産業も北陸三県を束ねるといふことの意味をしっかりと感じ、国際競争力を持った形で作り上げていくという意図があるため、北陸がその気になっているかどうかを確認しながらという形になると思うが、かなり期待している。

[西根委員長]

- ・「北陸フェムテック産業協議会(仮)」が、この地域未来促進法に委ねたところの延長線上にあ

り、そこに産官学金が揃ってくると、この協議会が実働していくというご提案と受け取った。

【KPI-4 について】

[西根委員長]

- ・「Femtech as a Service」産官学金がこのプラットフォームに乗ることが必要だと思うが、その構築に向け、特にデジタル技術等の活用について見ていきたい。
- ・デジタル活用により、パーソナルないしホームヘルスケアであったものが、地域ヘルスケアや職域ヘルスケア、さらに学域ヘルスケアに展開できるプラットフォーム、コミュニケーションや支援が繋がっていき、ソーシャルキャピタルやソーシャルヘルスを向上させるようなフェムテック、個人的だけではなく、社会的な幸福度を向上させ、プライバシーやセキュリティを担保できるフェムテック、エネルギーや環境に配慮したフェムテックなど、全体で「Femtech as a Service」のプラットフォームが実動するための要件を確認していきたい。
- ・協議会を「つくり、起こす」ことはできるが、それを「動かし、回す」ために、その原動力や核となるところとは何かを踏まえながら、具体的に詰めていきたい。
- ・人と人、人と地域、地域と地域、何かそういうものが繋がっていくようなソーシャルキャピタル的なものが実在しないと起こすだけで終わってしまう可能性がある。

[前田委員]

- ・回すというところで、協議会を回すという観点と、サービスの提供者やプロダクトの提供者がビジネスとしてサステナブルに成立させるという二つの観点があると思う。いろんなフェムテック、ソーシャルなウェルビーイングの事業の多くが、現実的には、自治体の支援や企業の福利厚生の一環としての企業健保との契約として、持続性を維持しているという事例が多い。私も中小企業経営者として、福利厚生に関しては「出費が増えるぞ。」という感じがあり、二の足を踏んでしまう。
- ・例えば、保育テックに預かることなく自治体と契約することで、サステナビリティを出している。フェムテックから離れるが、米国の事例で、高齢者と高齢者をサポートする人のマッチングを提供しているサービスは、企業の福利厚生として、企業のプライベートな保険組合と一括契約することで、事業の持続性を保っている。これは生産年齢人口の方が企業で仕事をして保険に加入しているわけだが、その親世代の方が独居だったり、サポートが必要であれば、当然、その親のサポートができていないと安心して仕事ができないということで、生産年齢人口の方の保険に付帯として、企業が福利厚生として付けている事例が散見される。こうしたスキームが、例えば、北陸において何か成立するのか、もしくはこの協議会が真剣にこのサービスやこのプロダクトが自治体としてサポートするに値するのだという評価の部分をしっかり回すことで、何かそこに価値を見出して、そこに企業がしっかりと協賛していく仕組みになっていくのだと思った。

[西根委員長]

- ・このプラットフォームやサービスを「Femtech as a Service」として、本当に動かし回すとなると、「B to B」や「B to C」という「to」だと回らないはず。「B with B」や「B with C」という、「with」の発想がないといけない。

[森田委員]

- ・前回にもお話ししたが、ひとり親やDV被害者が働けない状況の中で、その人達に仕事をしてもら

うという観点も含めて、生理の貧困を解決していこうというものを立ち上げようとしている。当然、企業からの協賛という形で、企業も巻き込んでやっていって県全体に広げていきたいという思いがあるが、仕事をしながらなので、なかなか手が回らないが、今、ホームページを作り運営しながら一つの事業体を作っていけないかと動いているところ。そうすることによって、困っている女性や貧困の女性、働く女性や学生にとっても、どこにでも置いてあれば大丈夫だし、そういう社会を作り上げるという意味では有益だと思う。北陸の特徴かもしれないが、ひとり親やDV被害者に対して、実の親でも理解のない人達がいる。富山の保守性、北陸の保守性という部分なのかとも思う。

- ・働く女性の環境を良くすることも大事。富山の企業での女性に対する意識は、ものすごい勢いで変わってきていると実感している。20 数年前には、女性トイレにトイレットペーパーさえ置いて無かった企業が、今や多目的トイレを設置する等、常に女性のために働きやすく、健康に配慮した作りをしていた。
- ・企業が女性管理職を増やしたいと言いつつも、なかなか増えないのは、女性側に「なりたくない。」「責任は負いたくない。」という意識があるからだが、今は過渡期だと思っている。IT を使いながらそういうギャップを埋めていけるものを作っていけないかと考えている。

[西根委員長]

- ・社会的な実装には、IT 技術はとても重要。
- ・企業は、個社として何をしたいのかではなく、社会的な活動を共創していくからこそ回り始めるもの。そういうところにデジタルがうまく入ってかみ合ってくると面白い。

[川上委員]

- ・地域ということを見ると、私は林業の方や山麓の方と仕事をしていることが多いが、街に住んでいる方とは、そもそも考える課題が違う。
- ・田舎の方は、高齢者が多く、変化を好まず、静かに暮らしたいという声の方が多い。我々がやろうとしていることと、実際に住んでいる方との気持ちの差やズレが生じる問題がある。一方で、今ある自然環境や資源をうまく消費しながら未来につなげていかないといけない。
- ・回すとなると、今の社会はデジタルで発信して届けることはできるが、物資の運搬やコミュニケーションは、どうしても人とのつながりなので、人がいてこそその価値もある。

[篁委員]

- ・アカデミズムとビジネスとの連携について情報共有をすると、アカデミズムの石川県の強みは、理工系のものでづくりが凄く伸びていること。金沢大学の理工系も先日、医学と理工の連携を促すような情報共有のワークショップを開いたが、ものづくりに限らず、測定技術等いろんな共有ができています。
- ・北陸先端科学技術大学院大学(JAIST)は、工学系・理工系が集積しており、いろんなテクノロジーがあると思うので、それらを俯瞰できるような人がこういうところに入って繋いでくれると良い。
- ・金沢大学では理工系のものでづくり以外に、最近、観光デザイン学類を立ち上げ、国の認可を受け、観光学をやっている。そこでサービス提供するツーリズムを含めたサービス提供していくところは、無縁ではないし、また、ベンチャー企業のサポートが凄く発達しており、学長も力を入れており、ベンチャービジネスラボラトリーが立ち上がり、企業が入れるビルディングもできたので、

何かをやろうという時に、アカデミズムとの連携はそこでできる。金沢大学の和田学長、私の同期だが、こういうところに入ってくると凄くスムーズに行くのではないかと思う。いずれにしても、ゼロから立ち上げるのは非常に大変だ。

- Team DiET もゼロから立ち上げ、最後の一押しがなく、いろんなアプリケーションを作ったが、普及までには至らなかったという苦い経験がある。
- 医学系の強みで、フェムテックに少し関わるのは、精神科が中心になって「ムーンショット」という国の大きなプロジェクトを獲ったが、金沢大学が主幹校で大阪大学と東京芸術大学を巻き込んで、子供の心発達センターというところが中心になって、50年後の子供が生き生きと輝ける、そういう世界を作るということで、具体的には発達障害の子どもの診断とサポートを行うもの。やはり女性の方の育児にどうしても頼らざるを得ないシーンが多いと思うが、お母さんにとっては大きなストレスとなる。子供達を集めてコンサートをしたり、ものを書いたり、芸術に触れることで子供の発達を促すという試みを頻繁にやっている。「ムーンショット」は成果を出していかなくてはならないので、企業とのマッチングする役割をこのフェムテックのところがやれば一番良いと思う。

[西根委員長]

- 今の若い世代は、情報発信とは言わずに情報配信という言葉を使う。情報は点から点へ線で結ぶ「発信」ではなく、情報は面から面に向けて「配信」するというので、その面作りが凄く重要であり、そこにデジタルの技術をしっかり入れていかなくてはならないと思う。

【KPI-5 について】

[西根委員長]

- KPI の5番は、まさに面に関係するところ。実際にこのフェムテックをやろうと言っても、やはりその中において認知度向上や普及啓発をやっていくかなくてはならない。
- 普及啓発活動として、リテラシーを上げていくことも含めて、具体的にはポスターやハンドブック等、諸々のメディアはあるが、どのように情報を共有していくのか、あるいはいろんなメディアとの協力によって、それをどういう形で掲載していくのか、あるいは学校や大学における教育プログラムの中にフェムテックの内容を取り入れてもらう等、若い世代に向けた普及啓発も重要である。

委員それぞれの具体例があれば紹介いただきたい。

[櫻井委員]

- 私自身はNPO 法人がんとむきあう会で、癌患者のお世話をしているが、先週小松で「認知症ほっとけんサミット」にブースを出して啓発活動に行ってきた。来場者の中に、自分自身はガン患者で、普段は認知症の両親の世話をすることがメインになっていたのですが、私たちのブースに出会い「自分もちゃんと病院に行かなくてはならない。」と認識をあらためたという方がいた。
- もともとフェムテックの対象の方の中には、自分の健康以上に家族の健康に目が向いている等、なかなか自分のための時間を取らなかったりするので、その女性達がワクワクするような場所で啓発活動を実施すれば一番効果的だと思う。身近なところでは、毎年春と秋にしいのき迎賓館(金沢市)で「百万石街中めぐり」という大きなイベントがあり、そこでは味わう、聞く、体験する、

買う等、いろんなコンセプトが設定されているが、例えば、その中の知るというコーナーで、フェムテックの啓発をするといった方法も効果的だと思う。

[西根委員長]

- ・確かに、フェムテック・フェムケアだと言って、人を寄せるのではなく、人の集まるところにフェムテック・フェムケアを仕込むという発想は良い。

[進藤委員]

- ・基本的に、行政主導でやった場合に、まず研究会ができて、その後に協議会ができて、結果が出ないうちに終わってしまうというところが結構あるので、今回協議会を作るとしたら、まずは三県の女性副知事がリーダーになることと、それが全国ニュースに出ること。全国ではそういうケースがないと思うので、まずはその辺からスタートすることが一番大事。
- ・協議会の活動に必要な運営費等も三県が拠出して行うような実効ある組織をどのように作るかだと思う。各地での展示会に出展する等、いろんなことにお金かかるので、例えば年会費を1万円や2万円では事業がなかなか進まないと思うので、結果を出せる実行力ある組織とお金が必要。国からも認められ、全国的なニュースにもなるというところをどうするかを考えた方が良い。

[西根委員長]

- ・コミュニケーション戦略を立てることが本当に必要だと思う。大きなメディアが取り上げてくれるためにはどのような仕組みが必要なのかを前もって作り、その後に活動報告の配信が来ると広く知れ渡っていくものと思った。

[日野委員]

- ・企業によっては常にフェムテックの社員向けの研修を女性だけではなく、男性の上司等にもちゃんと行っている企業もあるかと思う。それが一番手取り早くて確実に多くの人に伝わると思う。
- ・メンタルヘルスということであれば、女性に限らず男性も結構多くて、比較的スムーズに取り入れられやすいと思っていたが、一つのテーマでしかないので、フェムテック全体のテーマにはなりにくいところだが、そうしたやりやすいところから入っていくのも良いと思う。
- ・若い方向けもなかなか難しいとは思いますが、学校で実施してもらうことは凄く有効だし、予算の面もあるが、若い方に人気のあるインフルエンサーから「〇〇ケアって大事だよな。」みたいな配信をしてもらうだけでも、少しは変わっていくと思う。

[西根委員長]

- ・学校や大学の教育プログラムの中に入れてもらうことはとても重要だと思う。北陸地域において、もちろんニュースになるはずだが、性教育的な形で捉えられているような、つまり体のことだけではなく、体と心と絆のことみたいな形で、何かこの性教育というもののあり方を少し変容させられることを考えられたら面白いと思う。
- ・学校教育の中に、このフェムテック、フェムケア、体、心、絆を入れるにあたり、アイデアや具体策はないか。
- ・教育現場における普及啓発は重要になってくるし、北陸地域の中に介入することの大切さがこの辺にあったりもする。親世代は変わらないが子供世代が変わって親世代へ、そういう形の影響力

の違いが出てくると思うので、子供世代から親世代へのルートも確かにあると思う。

[川上委員]

- ・私が子供の頃は、学校での性教育や身体のことの保健体育の授業は、自分の生理がそろそろ来るぞという時に、学校の方から話があったと思う。そうすると、心の成長というところで、大人になるのが怖いなどいろんな感情が出てくると思うので、学校の方の教育では「それが普通だよ、当たり前なことだよ。」ということをして一年生の早い内からしても良いと思うし、保育園や幼稚園でも「男子と女子の体ってこうだよ。」という話はあっても良いと思う。
- ・今、アニメやそういったものがたくさん出ているので、子供にも大人にも受け入れられやすい形のものとして配信ができれば良い。漫画本が当たり前に家庭のリビングのテーブルに置いてあるような形でも良いとも思う。婦人科の先生の書籍等をトイレに置いておけば、一人の時間で正しい知識を自分で学んでもらえるかもしれない。分かりやすい形で皆に伝わると良いと思う。

[西根委員長]

- ・確かに皆で学ぶということ、一人で学ぶということ、どちらも大切であり、それをどのようにして作っていくのかがある。
- ・ヘルスケアについては、地域ヘルスケアや職域ヘルスケアはどんどん産業化も進んでいるが、学域ヘルスケアが一番遅れていると思っている。それも含めながら、このフェムテック・フェムケアを学域ヘルスケアの中にどのように入れていくかは、とても重要な課題だと思うし、これがないとまずうまく回らないとも思うので、大切に考えていきたい。

3. その他

- ・事務局より第4回の開催日程について報告

◇第4回(ハイブリッド開催)：2023年11月24日(金)，10：00～12：00

場所：石川県庁11階 1110会議室

以 上

『第4回 北陸地域におけるフェムテック産業振興の可能性研究会』議事録

日 時： 2023年11月24日(金) 10:00～12:00

場 所： 石川県庁11階 1110会議室 [オンライン併用]

出席者： 西根委員長、委員11名(前田・松原委員はオンライン)、オブザーバー6名、傍聴者4名

内 容：

1. これまでの研究会における検討結果を踏まえた「報告書(案)」の内容及び今回の論点について
[事務局 福井 幸博] ⇒配付資料に基づき説明

2-(1). プレゼンテーション

「北陸地域におけるフェムテック産業集積に向けて」[松原委員] ⇒画面共有資料に基づき説明

- ・ 知的クラスターで築き上げたネットワークを、もう一度掘り起こしていくことが現実的。
- ・ 連携支援計画を、フェムテック産業を軸にして動かしていけばどうか。
- ・ 北陸地域の産業、企業の集積と大学、公設試験研究機関を連携して、新しい動きを作っていけばどうか。
- ・ 中部圏全体の中で北陸を位置付けていくのも重要。
- ・ 北陸三県のような広域的な地域においては、多様な産業が連鎖していく・連携をとっていくといった二段構えの集積の戦略を考えたらどうか。
- ・ 福井も石川も繊維関係の企業が、フェムテック分野に参入していく可能性は大いに期待できる。
- ・ 今、北陸先端大を中心に金沢大学や北陸三県の大学・高専を巻き込んだ形で、スタートアップの支援事業を動かそうという動きが出ており、これが動いていくと、三県でスタートアップ支援と絡めて、フェムテック産業の動きといったようなものを強化していくことができる。既存の産業業種に働きかけるとともに、こうしたスタートアップでフェムテックの動きを作っていくのは、シナリオとしてはかなりあり得る。
- ・ セミナーや研究会を行っていくには、お金が必要。国の支援制度がどれくらい活用できるか検討し、一年ぐらいかけて、地域未来投資促進法の連携支援計画を作成し、国に出していけばどうか。
- ・ 北陸三県での広域的な連携を目指して、肝心なのは、フェムテック産業を集積形成事業として展開していく必要があり、それをどのような形で目標を立てているかも重要。その際、東京などのフェムテック関連組織や他の地域との連携も重要。
- ・ 連携支援計画の中で、複数の多様な業種をフェムテックという中で束ねた形で、産業の融合を図っていく方向は大事。ジェイコブズというよりは、EU が進めているような多様な業種、いわゆる多様性といったようなものを生かしたような新しい集積の考え方を北陸に展開するのが良い。
- ・ 研究会のメンバーとなると、フェムテック産業に非常に関心の高い産業・企業・大学の研究者になると思うが、産業協議会になると、まさに事業を展開するという方々になってくる。

2-(2). 自由討議 (以下の3テーマについて協議する)

- ① 【研究成果報告書の内容の確認と追記する事項等に関する審議】
- ② 【今後の展開として『北陸フェムテック協議会(仮称)』の設立及びミッションと運用等に関する審議】

③【KGIの明文化】

[西根委員長]

- ・2030年の理想の姿とするKGIがぼやけたままなので、報告書の段階においては、しっかりとKGIを定めておきたい。どういう文章にするのか、定義・提案のある方は。

[進藤委員]

- ・フェムテック産業は、結構地味。なにかキラリと光る技術的なもので産業振興していこうというような形があると良い。
- ・協議会は作れば良いと思うが、その前にまず、フェムテックの認知度を上げるプラットフォームが必要。ソフト的なプラットフォームを作って、最終的に産業振興に持っていくような仕組みにする。

[西垣委員]

- ・北陸地方にフェムテック産業を集積するというのは、ある意味手段であり、目的は北陸地域で女性が活躍しやすい社会を作ること。そのために、女性が働くにあたり、どんな課題があるのかというふうに、私自身は考えてきたので、KGIは、その方向がはっきりあった方が良い。

[森田委員]

- ・どの企業もフェムテックには、通じるものがあり、技術は持っている。それをフェムテックに持っていくよう仕向けていくような事業展開を目指すべき。
- ・フェムテック企業宣言みたいな形で、各企業が自分たちの会社で何ができるかを考えてもらうことで、企業にも積極的にフェムテックに関わってもらう方向が必要。

[日野委員]

- ・北経連のアンケートでは、北陸の女性は管理職をやりたくない割合が高かった。そもそも北陸で働いている女性は一般職の方が多く、重要な仕事は男性が行い、女性は補助的な仕事という意識が強いことから、自分が管理職になるのだという可能性を強く感じていない。また、管理職になると、長時間労働等から家庭との両立が難しくなると感じていることが分かった。
- ・フェムテックは、Gender Equality（同権、平等）ではなくて、Equity、公平の方。同じ土台に立てるように一人一人の事情に合わせて、制度面や働き方の形、健康課題がネックになって、仕事を頑張れないのだったら、それを技術的に解決して、同じように頑張れる環境を用意しようとするもの。

[西垣委員]

- ・最近ではD&Iではなく、DE&I(Diversity, Equity & Inclusion)。エクイティで普通に語られる世界によりよくなってきた。そういう文脈からこのフェムテックを考えていくのは非常に面白い。

[三浦委員]

- ・産業を築いていくのは、今の若い世代。フェムテックという言葉やエクイティという言葉、今のZ世代の大学生や高校生が知っているかと言われたら、認知度はほとんどないと思う。例えば、北陸三県の教育委員会のプログラムの中に入れてもらい、理解してもらわないとなかなか難しい。

若い世代の人たちがそこで何か想像できるものがあれば、新しい産業も出てくると思う。

[西根委員長]

- ・ KPI の 5 番の中でしっかりとそれを明記する必要があると思った。言葉、いわゆる用語に関して、広く知れ渡るための用語の開発なるものを KPI の 5 番の中に一つしっかりと明記しておきたい。
- ・ 「北陸地域で、社会のエクイティに基づいて、女性が活躍しやすい社会を作る。そのために北陸地域にフェムテック産業云々。。。 」といった言葉になるかなと思っている。その文章が出来上がったら確認することにした。

[篁委員]

- ・ 女性が活躍できる社会のビヨンド (beyond) 、次にあるものはもう前提として言わなくてよいか。例えば「フェムテックで女性が活躍できる社会を作ることによって何々がある。」のような。
- ・ 女性を支援することで、その先に健康寿命の支援や次世代の子供の健康等が見えるとか、社会全体が活性化するとか、産業を活性化するというのも前提として言った方が普遍性があるなら、キーワードとして入れた方が良い。
- ・ 更に、いきいき活躍できることによって何々が実現するみたいなどの、手段としてフェムテックがあると良い。

[西根委員長]

- ・ 文章としては大切どころ。KGI は、短くまとめる必要はないと思う。何が期待されるかみたいな未来像的なものが見えていた方が良い。

[西垣委員]

- ・ 地域に女性が住み続け働ける環境にしないと、日本全体の人口減少問題は、もうどうしようもないというのがベースにある。地方から首都圏に出て行くことを抑え、変えていくためには、地方で女性活躍ができるような社会を作らなければいけないというのが、今回のすべての議論の前提。
- ・ 日本の今後の持続可能性というところが、将来的に一番あるような気がして、そこまで書いても良いと思う。

[西根委員長]

- ・ 前提として「女性が活躍しやすい。」はあるが、他の自治体や行政では「暮らしやすい」という言葉に置き換えているところもある。「暮らす」という中に、働くとか学ぶとか住むという要件が入っていて、女性が暮らしやすい社会を作る。暮らすの中に(働く、学ぶ、住む・・・)と解釈を入れた書き方かなと思う。

[篁委員]

- ・ 人口減を防ぐためというのも一つのアウトカムである。誰に向けて KGI を説明するかによると思うが、誤解を招かぬよう、広く一般市民に伝えるなら、なぜそれが必要かということを知るようにした方が良い。

[西根委員長]

- ・ネクストステップとして、中間組織に委ねられることになるので、中間組織の方が理解できるような形で書くべき。
- ・対象としては、産業界だけではなく、教育界も含めるなど、幅広く。その責任者の方々が理解し、参画してみようというところに行き着けば良い。

[西垣委員]

- ・三県女性副知事を組織にもってこようと議事録に書いてあるが、たまたま今、三県の女性副知事だというだけでしかない話を、こういう組織論の中に位置づけるのは、やめていただいた方が良い。

[前田委員]

- ・一般的に、フェムテックのディスカッションをする際に、人口減少の話を絡めると、具合が悪い。いわゆる妊娠をサポートするテクノロジーもフェムテックの中に含まれていることから、女性に子供を産むことを期待するようなメッセージを込めることが、ウェルビーイングの観点から望ましくないということが結構議論されている。すなわち、子供を産む産まないは、あくまで女性の自由なので、人口減少を強くメッセージに込めるのは良くない。

[西垣委員]

- ・地域の持続可能性というか、地域の活性化を図っていくってところが大きくある。

[西根委員長]

- ・北陸三県が、広域で連携することにおいて、たまたま女性の副知事が今いるだけという話があったが、社会課題を解決していかなくてはならないとなると、やはり、次のネクストステップに進む時のその団体における会長は、この地方公共団体の幹部である必要があるということが、案の中に描かれている。

[長谷川委員]

- ・やはりそのエリアを統括しているところで、誰もがなるほどと思う方が一番良い。女性に限定しなくても良い。
- ・各エリアでも単発にいろんなものが出てきているが、横串を刺して、大きなエリアでやっているところはほとんどない。そういう意味では、今回の話をもっと広げた時に、エリアを面でやるということはすごく良い。

[西根委員長]

- ・ベストプラクティスとして、神奈川県未病産業研究会が機能しているという話があった。この時の旗振り役が黒岩知事であり、自治体の代表が旗振りをしたからこそ、その地域全体において、産業も企業も参画していったということがあろうかと思う。やはりその地域の長が立っているからこそだと思うが、北陸三県の場合の立ち方はどういう立ち方が望ましいのか。

[西垣委員]

- ・今回、経産省中部局に来ていただいているが、行政機関との関係では、福井県は経産省でいうと近畿局。その中で、地域未来投資促進法の支援計画というものを三県で作っていく等、いろいろ考えると、局との関係が絶対的になる。
- ・誰が三県をまとめるのかと言った時に、三県の入っている組織とは、北経連や活性化センターであり、やはりそういうところが引っ張っていくと、そこに三県も協力するし、経産局も中部と近畿と一緒に動ける。近畿局長には「中部局と近畿局と一緒に呼ばれるのは、北経連の会だけだ。」と、いつも怒られているくらいなので、北経連が立つのが組織的には一番良い。

[森田委員]

- ・歴史的にも、北陸は北陸三県だけの電力圏を持っており、これはただ与えられたのではなく、自主的に勝ち取ってきたという歴史がある。北陸は凄くまとまりある地域だと思っており、三県で誰を長にするかは難しい。やはり北経連かなという感じがする。

[西根委員長]

- ・この中間組織においては、連鎖的な機能が必要になってくる。立場的にそれを引き入れることができるのが北経連では。そこにいわゆる連鎖的に動くことを考えた時に、やはりアカデミアの連鎖が必要になってくると思う。

[篁委員]

- ・北陸産業活性化センターが良い。ずっと旗振り役をして、内容を一番把握しているし、人脈的にも。

[事務局・福井常務]

- ・北経連は、なかなか難しいだろう。基本的に会員企業400社に資する活動が念頭にあることや、任意団体でもあるので、国の補助・委託事業が行えない。そういう意味では、北陸産業活性化センターは、北経連が作った団体でもあり、本来北経連が行うべき、そのような役割を担うという位置づけの組織でもあるので、適当かと思う。脆弱な組織ではあるが、これまでライフサイエンスクラスターをはじめ、三県との連携した事業の経験もあるので、各自治体の支援をいただきながらやっていけば一番良いと思う。ただ、我々だけで何かできるわけでは決してないので、そこは各自治体のサポートは不可欠である。

[事務局・福井特別参与]

- ・今回のフェムテックは、産学官医民の五つがコア。この五つの皆様には、本来の仕事があり、ベクトルがいろいろ違うので、これを統一することが必要。過去に実績のある北陸産業活性化センターがやるにしても、エリアの広い情報を持っている自治体からの協力は不可欠である。

[松原委員]

- ・経産省の立場ではないが、地域未来投資促進法をちゃんとした形で動かしていくには、県を越えた連携支援計画を日本の中でいくつも作っていただきたいという強い思いがあるので、是非、フェムテック産業でもしっかりとやっていただきたい。そのためには、中核となる地域中核企業が

フェムテックの中で盛り立てていき、会長はそのような民間企業の社長あたりに音頭を取っていただくのは悪くない。

[西根委員長]

- ・これまで、我々は定義型の研究会体制をとっていたが、来年度以降は、実践型の協議会なのか研究会なのか、あるいはその役割を二つ設けるのかというのはあるが、やはり実践型の方に移すことになるので、研究会はこれが最後ということになる。
- ・このあり方についての議論をしたい。産業集積ができるような実践型の中間組織が必要になってくるが、このあたりの考え方・意見を聞きたい。

[櫻井委員]

- ・金沢大学で今実施している女性の研究が紹介されたが、彼女はもともと 21 世紀美術館のキュレーターもしており、女性が暮らしやすいとか、そういったことになる時に金沢の場合、アートという観点がすごく重要だと思っているので、そういう方もメンバーに入っていたら良い。

[川上委員]

- ・出産しての子供連れの買い物や働きに出たりするのが今までで、一番大変だった。フェムテックで、同様に大変な人たちをサポートすることが、生きやすい・暮らしやすい地域に繋がる。

[西根委員長]

- ・多様性、多様種の集積によって、中間組織も設立されていくべきという方向性が見えてきた。その中で、アートとの連鎖やデザインとの連鎖も当然に起こってくる。連鎖を考えていくと、その集積、あるいはその幅を広げていくとの考え方の中に、商品・サービス・施設という商材の連鎖や、地域・職域・学域という領域の連鎖、あるいはメディカル・ヘルス・ウェルネス&ビューティーという分野の連鎖がある。これらの連鎖がうまく起こるような中間組織のあり方とは。

[長谷川委員]

- ・企業人よりも、もう少し地に足が着いている NPO や NGO の方や地域で活躍している方が良い。エッジが立ち過ぎている方が入ると大変なので、そこそこの方が良い。そういう方は、外に向かって凄くリンクしている。フラットな感じにできたら良い。

[西垣委員]

- ・今の時代は、行政が行政の中だけでやれることには限界があり、市民の方と一緒にやるという官民共創の方向になっている。例えば、デジタル庁では、予算を使って何かをやる時、市民と一緒に参加する仕組みがあるかどうか要件になっている。一般社団法人には、公務員は入れるので、NPO・NGO など法人格のない問題を乗り越えるために、公務員が一般社団法人を作って、そこにいろんな人たちが入って来るというのもある。それこそ財団法人でも。
- ・課長級以下なら、役所の届けで済む。私が部長の時は、官邸への届出が必要で、一般社団法人での事業目的が政策方向と合致しているか、無給であるかなどが条件だった。やりたいことを組織の中だけでやれなければ別の形でやるという方向に、特に若者は完全にそのようになっており、一つの組織に所属することを誰ももう嬉しく思っていない。

[長谷川委員]

- ・そういう流れが、ここ北陸エリアを先発に始まったら、もっと凄い。
- ・最初の流れとして、そのようなものが作れたら、波及効果はもっと大きい。影の目標でも良いが。

[西垣委員]

- ・やはり社会課題解決というところに今後の方向性があり、その課題を一緒になって考えると、別に立場は何でも良くて、そこに多様性というのは当然入ってくる。

[森田委員]

- ・最近はいろんな形で若い世代を取り込むという形が進んでいる。社会課題という形でとらえれば、いろんな年齢層やいろんな職種、社団法人も入ると思う。

[西根委員長]

- ・中間組織のあり方として、EU型における多業種集積のあり方が好ましいとの話があったが。

[松原委員]

- ・EUの議論は、EUの地域政策の中で、私の専門である経済地理学の仲間たちが、二つの多様性を検討している。一つは、関連多様性という多様性の中で、産業の連関があるような親和性のある産業を、かなり意識的に計画的に連鎖を作り出そうという方向。もう一つは、ブリコラージュと言う、いわゆるごった煮で、あまり計画的にやっても仕方がない。むしろ新しいイノベーションは、ごった煮状態から生まれてくるという考え方。関連多様性と非関連多様性のどちらが有効なのかという議論での結論は出てきていない。
- ・北陸フェムテックは、ごった煮状態で行くのかなと思っており、ごった煮状態をマネジメントするのは結構大変だと思うが、そこは、北陸産業活性化センターの力量が問われてくるところ。
- ・産業集積の議論の中で、医はあまり入ってこない。医療関係のクラスターはあるにはあるが、今回、医の部分がかなり入ってくると、今まであまり関わっていないような主体とどう関係をつけていくのかが、非常に気になる。
- ・連携支援計画の話の中で出てきた、地域中核企業を事業に生かしていくという面で言うと、地域の中核的な病院が一つの射程に入ってくる。

[西根委員長]

- ・確かに、このフェムテック・フェムケアについては、アウトカムの設定やエビデンスの検証が出てくるので、我々の中では、この医が入ることは必須になってくる。その中で、医学部だけではなく、病院という組織もあり得る。

[進藤委員]

- ・中間組織の名称は「(仮)北陸フェムテック産業協議会」の産業はいらないのでは。

[三浦委員]

- ・今までの議論からすると、申し訳ないが、陳腐化した言葉になりかねない。

[事務局・福井常務]

- ・それは、特に産業集積を目的とするわけではないからという認識でよいか。

[事務局・福井参与]

- ・産業は、少し古い言葉であり、漠然としているので、これを仕事に読み替え、その仕事をイメージする言葉に入れ替えれば、産業政策をやるのではないかと思ったりもする。まだそこはイメージで、深く考えていないので、産業にはこだわらないこととする。

[三浦委員]

- ・北陸には、既に結構いい素材のモノを出して、世界に羽ばたいている会社がある。もっと何かこの協議会を通して広めていくなど、いろんなことを周知してもらうことは大事。

[事務局・宮西]

- ・どのようなことをしている団体かを、ある程度名称から分かるように、活動目的や取組状況等を名称の中に入れてはどうか。例えば「推進」を付けて、北陸フェムテック推進協議会にするとか。

[西根委員長]

- ・この大きな枠を決めて、その後に研究会や分科会というものが生まれてくると思われる。

[西垣委員]

- ・経産省の中でフェムテック支援をしている社会経済室と連携しながら地域振興企画などを作っていた方が良い。社会経済や女性活躍を進めており、まさに DEI (ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョン) を管掌している。

[西根委員長]

- ・先ほどの北陸フェムテック推進協議会、これを仮に北陸フェムテック社会協議会とした場合どうなるか。

[進藤委員]

- ・なんか福祉協議会みたい。

[長谷川委員]

- ・社会に実装するという意味では、社会の方が良いが、実装となると、産業やモノが出てきてしまう。モノ＝産業なので、モノづくりにならないよう社会ぐらいにしておく方が良い。

[進藤委員]

- ・ソーシャルの方がファジーではあるが、むしろ良い。

[西根委員長]

- ・推進協議会は、いろんなところで使われており、北陸フェムテック推進協議会として、陳腐化するよりは、北陸フェムテック社会協議会の方がメディア受けも良い感じがする。

- ・本日の案件は、いろんな議論をしながら、コメントは出尽くしたので、ここまでとさせていただきます。

[事務局・福井常務]

- ・当研究会は、各分野の有識者の皆様にご参加いただいたことから、皆様からのプレゼンや発言については、私個人としても大変興味深く、勉強になった。
- ・報告書案については、不備なところもたくさんあり、今後まとめていくにあたり、協力いただきたい。
- ・今後、協議会を立ち上げ、実効力ある組織として推進していくという方向性は、ある程度明確にできたので、皆様からのアイデアを参考にしながら、この協議会で具体的に何をしていくのかということについて、年内を目途に取りまとめる報告書に反映していきたい。
- ・まずは三県との連携を図って、この協議会を、一つのプラットフォームにして、来年度以降も議論を深めていければと考えている。
- ・皆様には来年度以降もご指導ご協力をお願いしたい。

以上